

2022 年 11 月

食料安全保障月報

(第 17 号)



令和 4 年 11 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 11 月食料安全保障月報（第 17 号）

目 次

概要編

I	2022 年 11 月の主な動き	1
II	2022 年 11 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「今後の世界の生産・貿易動向を左右するブラジル」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	8
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	9
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	10
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	12
5	食品小売価格の動向	16
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	17
7	FAO 食料価格指数	19

品目別需給編

I 穀物

1	小麦	1
	＜米国＞ 2023/24 年度の冬小麦の発芽進捗率は 5 年平均並の 81%	
	＜カナダ＞ 生産量は回復し、過去 5 年平均比 14.3% 増、品質は良好の見込み	
	＜豪州＞ 生産量は前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、史上 2 番目の 34.5 百万トン	
	＜EU27+英国＞ 2023/24 年度の冬小麦の生育状況は大部分の EU 諸国で良好	
	＜中国＞ 2022/23 年度の小麦生産量は、史上第 1 位の 138 百万トン	
	＜ロシア＞ 生産量は史上最高の 91.0 百万トン	
	＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の冬小麦の播種進捗率は 91.3% (11 月 7 日時点)	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 4 割減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により長粒種の価格が更に上昇	
	＜インド＞ モンスーン終了の遅れによりカリフ米の収穫に遅れ	

- <中国> 一期作の収穫は終了、二期作も収穫期を迎えている
- <タイ> 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し
- <ベトナム> インドの輸出規制による代替需要増で輸出価格が更に上昇

II 油糧種子

- 大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
- <米国> 生産量は減産、輸出減の見通し
- <ブラジル> 生産量は史上最高、輸出量も史上最高の見通し
- <アルゼンチン> 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.5 倍（輸出税継続）
- <中国> 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し
- <カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

「我が国と世界の農業機械をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：ブラジル・パラナ州の大豆圃場（11 月 8 日撮影）

10 月 16 日に作付され、作付当初からまとまった雨が記録されたため、現在の作柄は良好。

(概要編)

I 2022 年 11 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の収穫がほぼ終了し、南米では作付けから生育期を迎えている。

品目別にみると、11 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、3 月には過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているが、高水準で推移している。11 月 19 日に期限を迎えたウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意は 120 日間(2023 年 3 月 19 日)延長されたものの、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、世界の生産量が米国や欧州の乾燥等の影響により前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通し。いずれの品目も期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：10 月）については、9 月から概ね横ばいで推移（136.0→135.9）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年 10 月の値は 133.2、前々年 10 月の値は 101.4）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が昨年 10 月に、2008 年のリーマン・ショック後の最高値を記録したものの、本年 10 月は、その最高値から 7 割程低下し、直近 5 カ年の平均値とほぼ同水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、11 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の11月11日報告によると、2022/23年度の冬小麦は収穫が終了し、1,940万トン収穫された。とうもろこし等の夏作物も収穫が開始され、計画の39%に当たる960万トンが収穫された。

2023/24年度の冬小麦の作付けは、11月8日報告によると計画の91%に当たる364万ヘクタールが終了した。

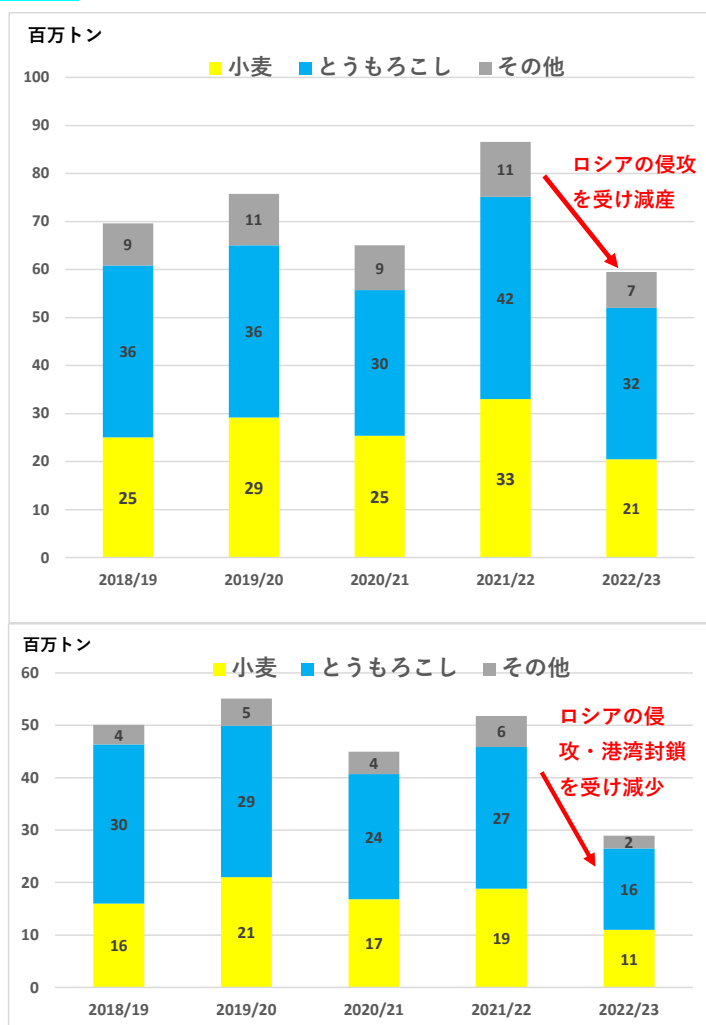
7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開されており、10月31日時点で、輸出量は約973万ト（うち、とうもろこし419万ト、小麦276万ト、他）。目的地はスペイン、トルコ、イタリア、中国等。

11月17日には、ウクライナの穀物輸出について、11月19日から120日間（2023年3月19日まで）延長することで合意した。

米国農務省（USDA）の11月見通しによれば、2022/23年度の小麦の生産量、輸出量は、それぞれ前月見通しから変更はなく2,050万トン（対前年度比38%減）、1,100万トン（同42%減）の見通し。

一方、とうもろこしの生産量、輸出量は、それぞれ前月見通しから変更はなく3,150万トン（同25%減）、1,550万トン（同43%減）の見通し。

（参考）ウクライナの小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022.11)

1 米国のとうもろこし、大豆は夏季の乾燥で減産見通し

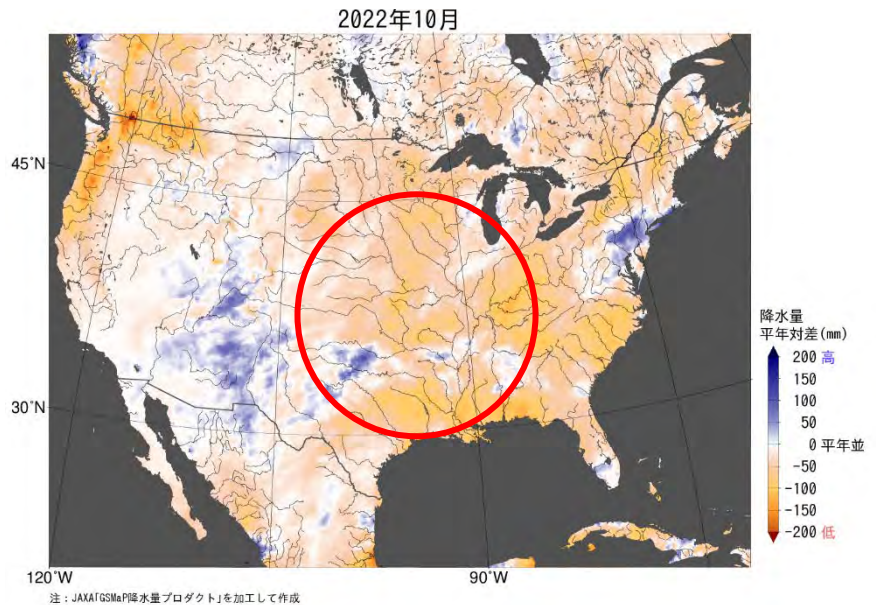
米国のとうもろこし、大豆は 11 月中旬でおおむね収穫が終了した。米国農務省の 11 月見通しで、生産量は前月と比較してわずかに上方修正はされたものの、夏季のコーンベルトの一部での高温乾燥の影響から、とうもろこしは対前年度比 8 % 減の 3 億 5,380 万トン、大豆は対前年度比 3 % 減の 1 億 1,830 万トンが見込まれている。

この結果、輸出量は、とうもろこしは前年度比 13 % 減の 5,460 万トン、大豆は前年度比 5 % 減の 5,570 万トンが見込まれている。

なお、期末在庫率は、とうもろこし 8.3 %、大豆 5.0 % と低水準となっている。

一方、ミシシッピ川流域の降雨不足により、10 月の水位が 1927 年の観測開始以来の最低水準となるなど、はしけ運送にも一部支障が出ており、10 月のはしけ運賃が前年の 3 倍程度に上昇した。今後の動向に注視が必要である。

米国。特にミシシッピ流域の 10 月の降水量は平年より少ない



2 豪州の冬穀物・油糧種子は 3 年連続豊作見通し

豪州は 11 月以降冬作物の収穫が開始される見通し。USDA の 11 月見通しによれば、豪州の小麦の生産見通しは天候に恵まれ、前月見通しから 150 万トン上方修正され、3,450 万トンと過去最高の豊作となった前年度に迫る見通し。大麦の生産見通しは 1,270 万トンと 3 年連続で高水準となり、菜種は 730 万トンと史上最高を更新する見通し。

特に、ウェスタンオーストラリア州においては、天候に恵まれ、GIWA（ウェスタンオーストラリア州穀物団体）の見通しによれば、小麦 1,260 万トン（前年度 1,289 万トン）、大麦 615 万トン（同 837 万トン）、菜種 398 万トン（同 313 万トン）と見込まれており、小麦、大麦は前年度に迫り、菜種は史上最高を更新する見通し。

3 パキスタンの洪水でコメ生産量は減少の見通し

USDA によれば、パキстанは、南部のシンド州を中心に、洪水による影響からコメの生産見通しが 3 か月連続で下方修正され、前年度比 28 % 減の 660 万トンとなる見通し。

輸出量は、生産減に伴い、400 万トンと前年度比 17 % 減が見込まれている。

Ⅱ 2022 年 11 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、10月末、320ドル/トン台半ばで推移。11月に入り、10月29日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したことにより、11月当初に330ドル/トン台前半まで一時的に値を上げたものの、11月2日にロシアが合意への復帰を表明したことで290ドル/トン台前半に値を下げた。その後、一時、ポーランドへのミサイル着弾による政治的緊張から300ドル/トン台半ばまで値を上げたものの、ウクライナからの穀物輸出再開に関する4者合意の120日間(2023年3月19日まで)の延長決定、ドル高から値を下げ、11月下旬現在、290ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、10月末、270ドル/トン台前半で推移。10月29日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したことにより、11月当初に270ドル/トン半ばまで一時的に値を上げたものの、11月2日にロシアが合意への復帰を表明したことで値を下げた。その後も、米国の収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、ウクライナからの穀物輸出再開に関する4者合意の120日間の延長決定、世界的な景気減速懸念等から、値を下げ、11月下旬現在、260ドル/トン前後で推移。

コメは、10月末、440ドル/トン前後で推移。11月に入り、急速なバーツ高や、ベトナム産米よりタイ産米が低価格のため需要が増大していること等により値を上げ、11月下旬現在、450ドル/トン台後半で推移。

大豆は、10月末、510ドル/トン台後半で推移。11月当初、ブラジル大統領選の結果を受けたトラック運転手等の道路封鎖を受けて、520ドル/トン台後半まで値を上げた。その後、米国の期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等から値が小幅に上下し、11月下旬現在、520ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 60 万トン下方修正され 27.5 億トン。消費量は、前月予測から 150 万トン上方修正され 27.8 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.5%となる見込み(資料2参照)。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.5 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで上方修正、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

(注：数値は 11 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.5 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を上回り、19.3%となる見込み。

(注：数値は 11 月の USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：今後の世界の生産・貿易動向を左右するブラジル

本年は世界各国で干ばつや洪水などが発生しており、南米ではラニーニャ現象の影響が懸念材料となっている。また、ウクライナ情勢が不透明な中、米国のとうもろこし、大豆が前年度より減産見通しで、ブラジルへの需要の集中が見込まれている。

このことから、世界及びブラジルの生産・貿易動向についてまとめた。なお、ブラジルの大豆、とうもろこしの生産量については、史上最高と見込まれている。

注：文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、ブラジルのとうもろこしは 2023 年 3 月から 2024 年 2 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P.27 参照)。

I. 世界の生産・貿易動向

1 大豆

世界の生産量は前年度を上回る見通しであるものの、主要生産国の米国は減産見通しである。今後の世界の生産・貿易動向は、2022/23 年度の夏作が作付け期から初期生育期を迎えている南米次第である。南米では、現時点では作付面積の増加による大幅な増産が期待されている。

しかし、ラニーニャ現象が継続している中、アルゼンチンやブラジルのマット・グロッソ州等の主産地では、11 月前半は降雨が少なく、土壌水分量は平年を下回る状況となっており、今後の生育状況が注目されることである。

2 とうもろこし

世界の生産量は前年度を下回る見通しとなっている。主要輸出国では、小麦と同様に、ロシアの侵攻によるウクライナで減産（3,150 万トン：以下 USDA11 月見通し）、米国でも中西部の高温乾燥で減産見通しとなっている。輸入国側では、EU が夏季の干ばつにより、対前年比 20%以上減産（同 5,480 万トン）となる見通しである。

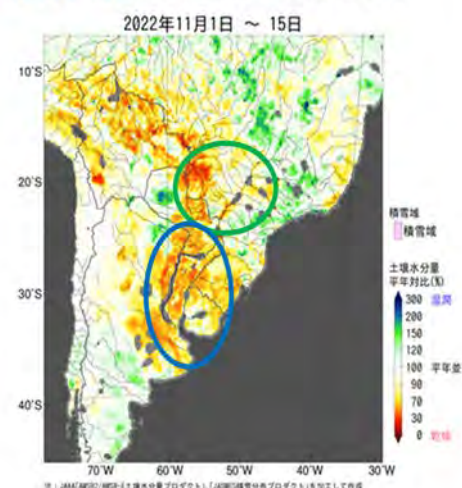
このため、今後のウクライナの輸出状況（詳細は、P.7【参考】を参照）にもよるが、2021/22 年度の冬作が豊作で、史上最高の生産見通しとなっているブラジル産に各国からの需要が集中するとみられる。特に、年末以降輸入を開始するとみられる中国の動向が注目される。

3 小麦

世界の生産量は前年度を上回る見通しとなっている。

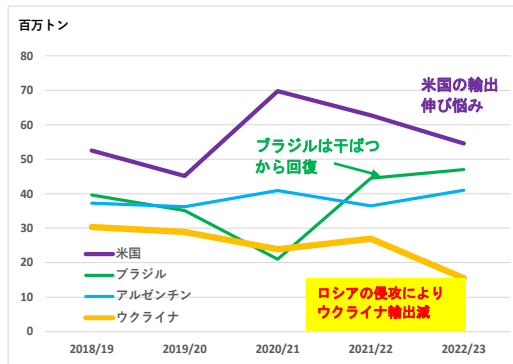
主要輸出国では、ロシアの侵攻を受け減産見通し（同 2,050 万トン）となっているウクライナを除き、ロシアは史上最高の生産見通し、カナダでは生産量は 3,500 万トンで、干ばつであった前年度を大きく上回り、過去 5 年平均を上回る見通し。また、豪州の生産量は 3,450 万トンと、3 年連続

図1 南米の土壌水分量の平年対比（JASMAI データ）
11月前半のブラジル・マットグロッソ州（緑○）から
アルゼンチン（青○）にかけ土壌水分量が平年より少ない。



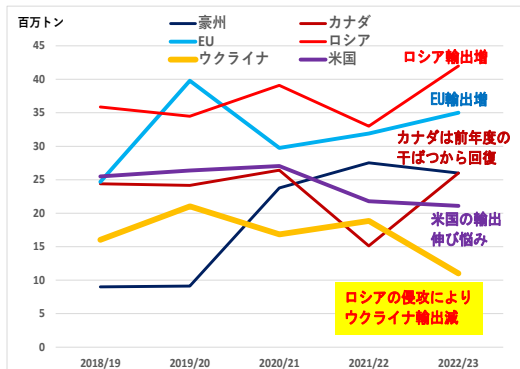
資料：農林水産省「農業気象情報衛星モニタリングシステム」
<https://jasmai.maff.go.jp/>

図2 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022. 11)

図3 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022. 11)

豊作見通しとなっている。米国産は、輸出価格が高いため輸出競争力として劣るとみられる。

II. ブラジルの生産・貿易動向

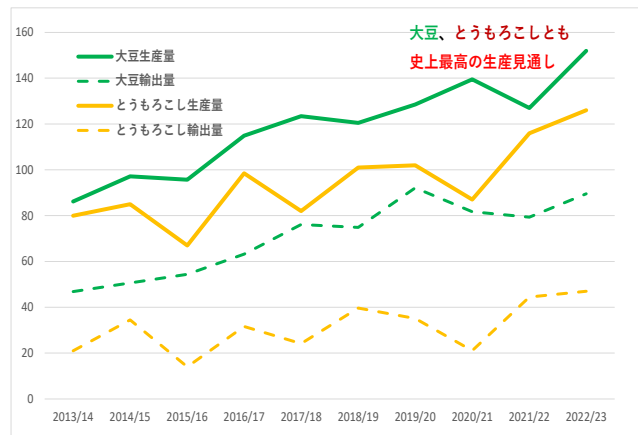
1 大豆

(1) 生産見通し

3億トンを超えるブラジルの穀物・油糧種子生産のうち、約5割を占める大豆の作付けは、降雨に恵まれ順調に進展し、11月に入り最大の生産州のマット・グロッソ州でほぼ終了し、その他の主産地でも作付け終盤に入った。

CONAB（ブラジル食料供給公社）の11月見通しによれば、作付面積・単収・生産量とも史上最高で、生産量は1億5,350万トンと見込まれている。作付面積が増加した要因には今年に入ってから大豆相場の高騰が背景にあるとみられる。

図4 ブラジルの大豆、とうもろこしの生産量・輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 11)

(2) 輸出見通し

大豆の輸出に関しては、USDAの11月見通しによれば、過去最高の2019/20年度（9,210万トン）に次ぐ8,950万トンと見込まれている。輸出量増加の背景として、史上最高の生産見通しに加え、米国の生産量・輸出量が前年度に比べ減少する見通しとなったこと、中国の経済成長が鈍化しているとはいえ、ブラジル産の輸入が前年度より増加することが要因とみられる。

10月末に実施されたブラジル大統領選で、現職のボルソナロ大統領の敗北を受けて、支持層のトラック運転手による高速道路封鎖などの抗議活動が行われたが、11月下旬現在、沈静化しており、農産物輸出への支障はないとみられる。

2 とうもろこし

(1) 生産見通し

穀物・油糧種子生産のうち、約4割を占めるとうもろこしについては、9月以降、大豆と同時期に作付けが行われる夏とうもろこし（全体の約2割強）と、大豆の収穫後に作付けされる冬とうもろこし（サフリーニャ：全体の約8割弱）に大別されるが、近年の大豆の増産に伴い、冬とうもろこしの生産量が大きく増加している。

夏とうもろこしの作付けは南部のパラナ州などでおおむね順調に進展しており、CONABの11月見通しによれば、2,820万トンとなっている。冬作については、作付けは来年となるが、穀物価格の高騰の影響を受け、作付面積が増加するとみられ、豊作となった2021/22年度（8,780万トン）をさらに更新する9,820万トンが見込まれている。現時点の見通しであるが、合計で1億2,640万トンと史上最高を更新する見通しである。

(2) 輸出見通し

とうもろこしの輸出に関しては、2022/23年度の米国の減産見通しやロシアのウクライナ侵攻など他の輸出国の輸出量が減少していることから、2021/22年度の冬とうもろこしについて輸出量が大きく増加していた。さらに、USDAの11月見通しによれば、2022/23年度の輸出量も史上最高の4,700万トンが見込まれている。これは、史上最高の生産見通しに加え、米国

の生産量・輸出量が前年度と比べて減少する見通しとなったことや、ロシアの侵攻によりウクライナ産の輸出が不透明なことが要因とみられる。

中国が従前ほとんど輸入していなかったブラジル産とうもろこしに関し、本年5月に検疫条件などで合意しており、報道等によると、中国海関（税関）が11月上旬に、ブラジル産とうもろこし輸出業者リストを更新したとされている。早ければ、本年末にも対中国向け輸出が開始されるとみられている。

※報道によれば、11月23日付けでブラジル産とうもろこしの中国向け輸出が開始された模様。

3 小麦

ブラジルは、小麦の主産国ではなく、年間消費量の1,200万トンのうち、不足分である通常約600万トン程度を隣国アルゼンチンから輸入している。しかし、ブエノスアイレス穀物取引所によると、アルゼンチンの小麦生産見通しについて、乾燥・霜害の影響により1,240万トンと前年度から大きく減少する見通しのため、ブラジルは米国、カナダ、ロシアなどメルコスール以外の国々から輸入する動きをみせている。

2021/22年度では、ブラジルはメルコスール以外の国々から約15.5万トンの小麦を輸入したが、本年は100万トンに達する可能性がある。しかしながら、世界の小麦貿易に与える影響は小さいと見られる。

【参考】ウクライナの黒海からの穀物輸出に関する4者合意の延長

10月8日に、ロシア本土とロシア占領下のクリミア半島を結ぶクリミア橋の爆破事件が発生し、その後、ロシア側のウクライナ国内へのミサイル等による反撃があり、ウクライナ、ロシアの穀物輸出への影響が懸念された。しかし、10月下旬現在、小麦や大豆を中心とした穀物相場は、ドル高や米国の収穫進展などから9月下旬時点と比較して下落し、11月21日には小麦の相場は8ドルを下回った。

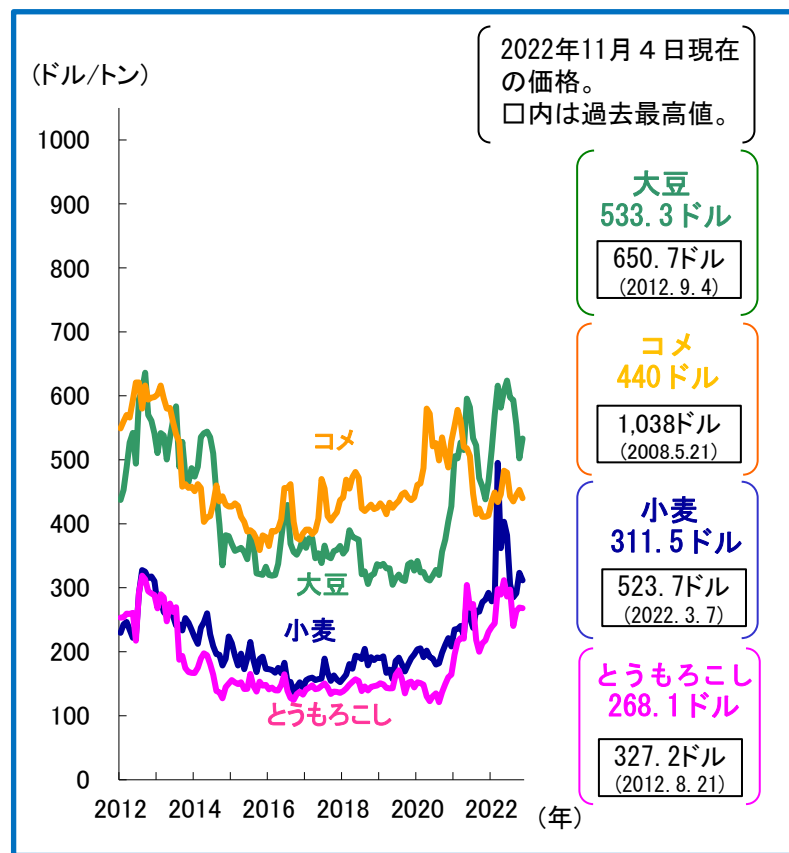
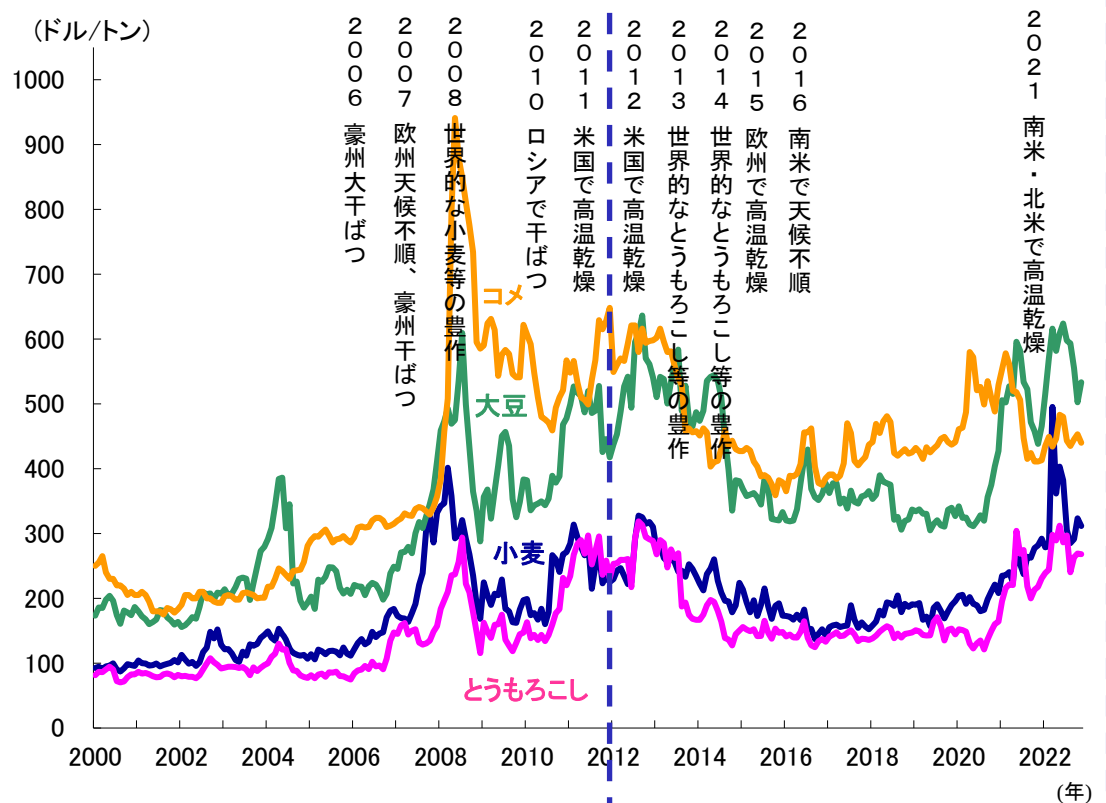
一方、ウクライナの黒海からの穀物輸出に関する4者合意については、10月29日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したものの、穀物輸出回廊を利用する攻撃は行わないとのウクライナ側の回答を受け、ロシアは11月2日には復帰すると表明した。

結果として、11月19日で120日間の期限を迎える4者合意について、国連は、11月17日、更に120日間の延長（2023年3月19日まで）に合意したと公表した。国連によれば、ウクライナ産穀物等の輸出に加え、ロシアからの食料・肥料輸出に対する障壁を取り除くことについてコミットしているとのことである。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



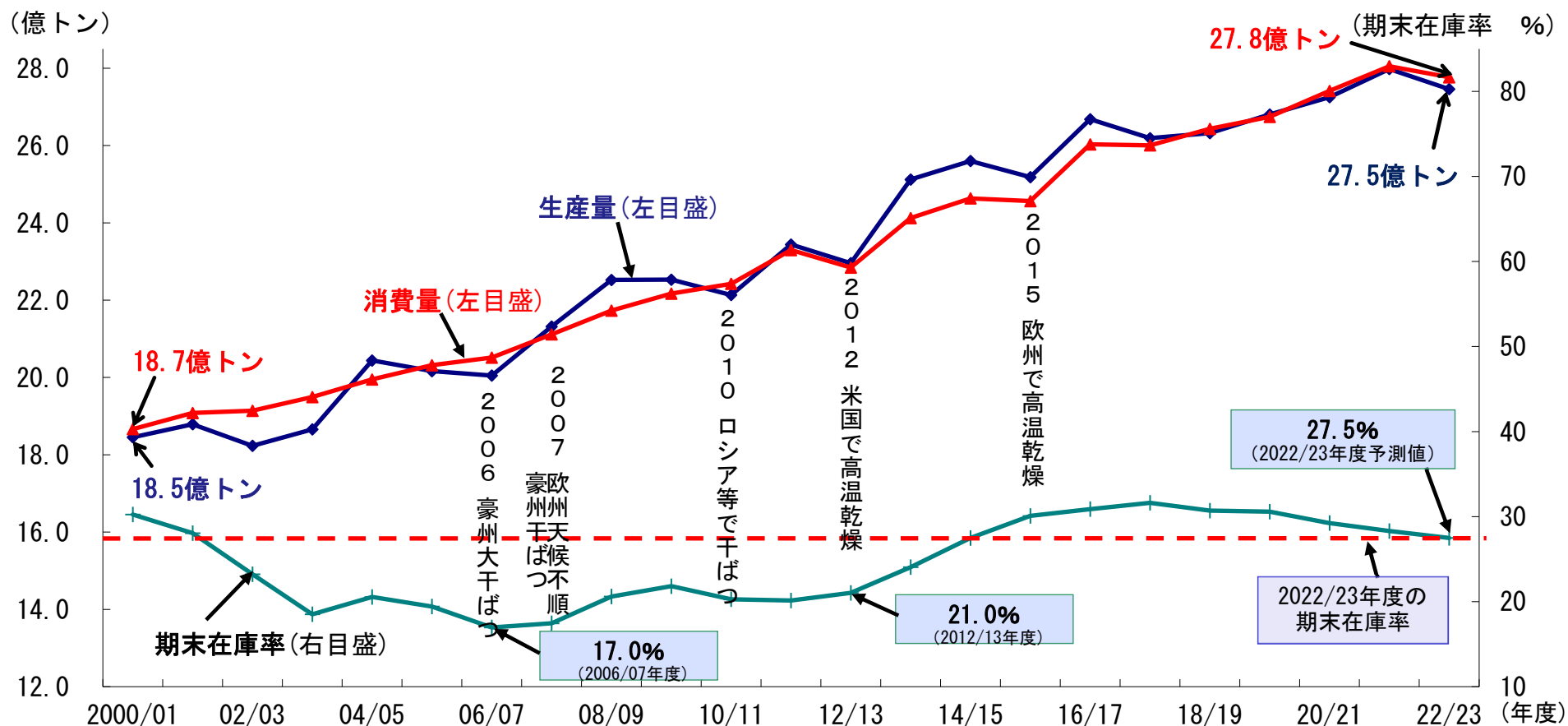
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100% 2等のFOB価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

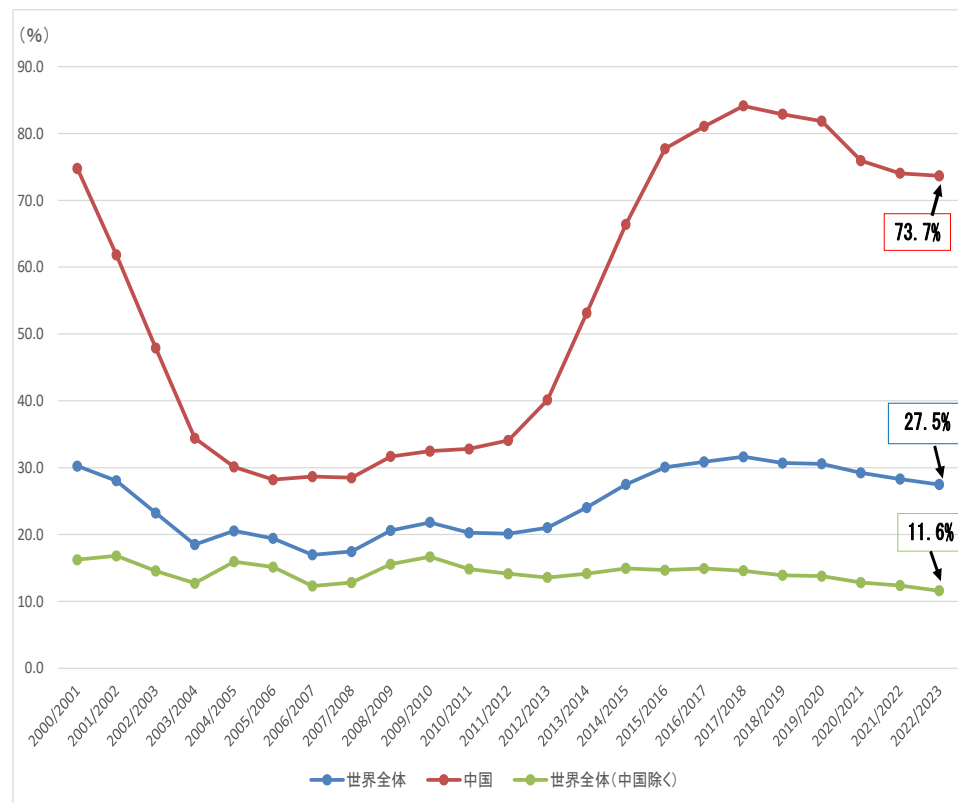


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(November 2022)、「PS&D」

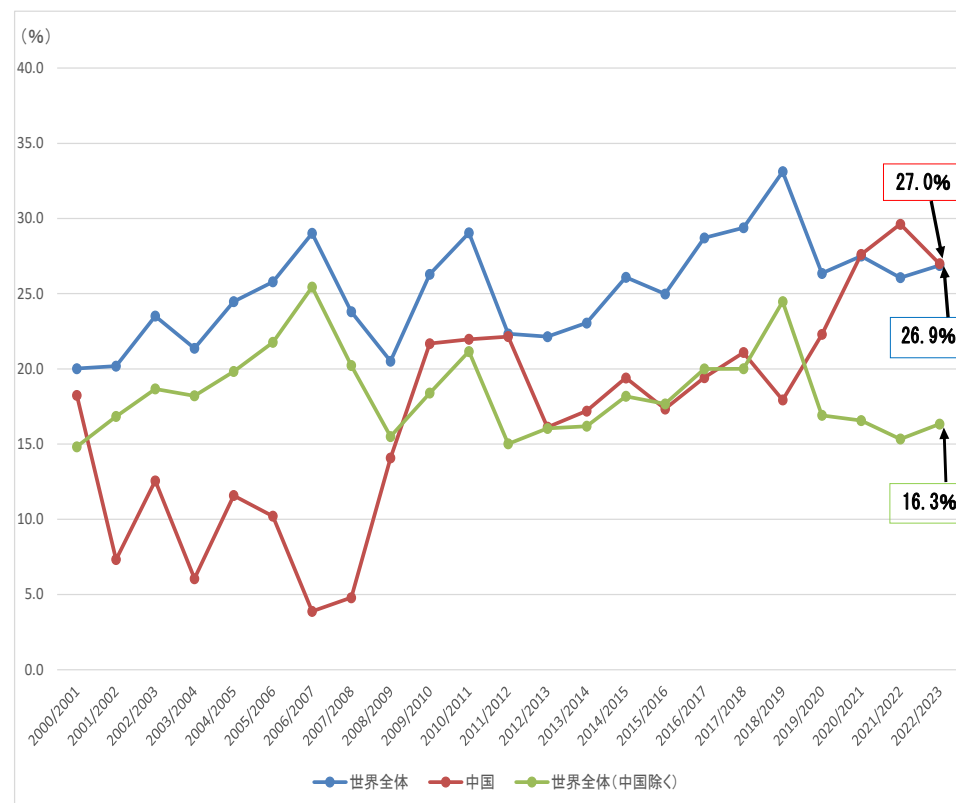
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(November 9, 2022)

注：1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等（大豆除く）。

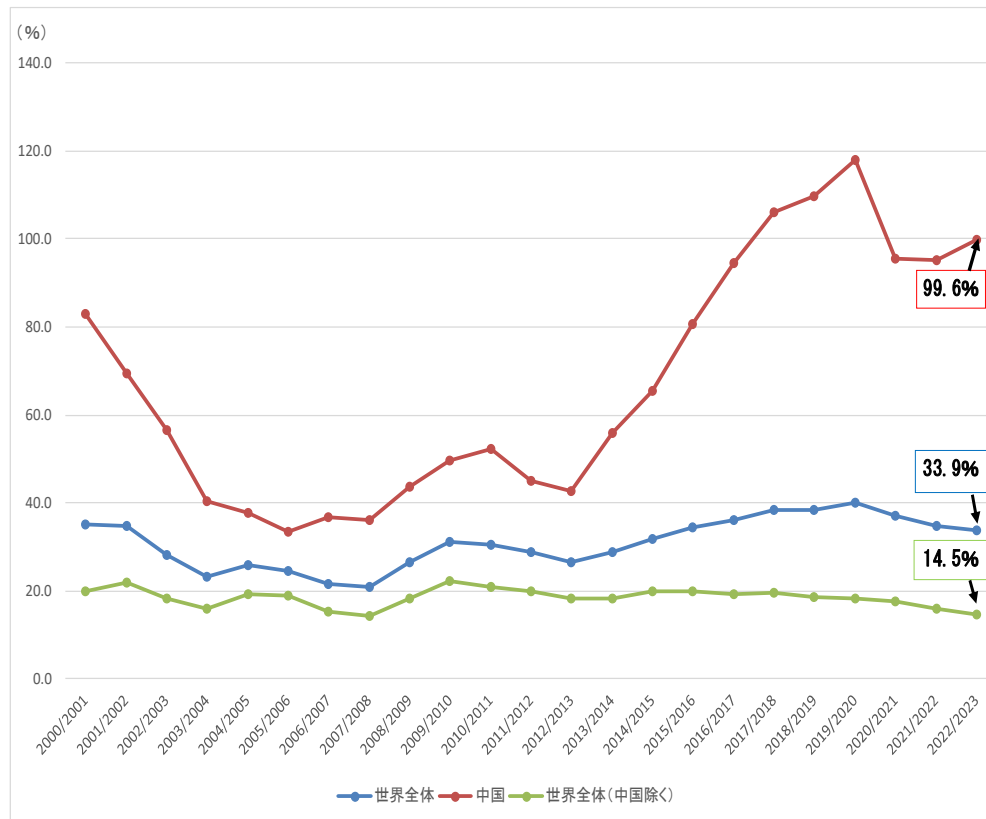
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

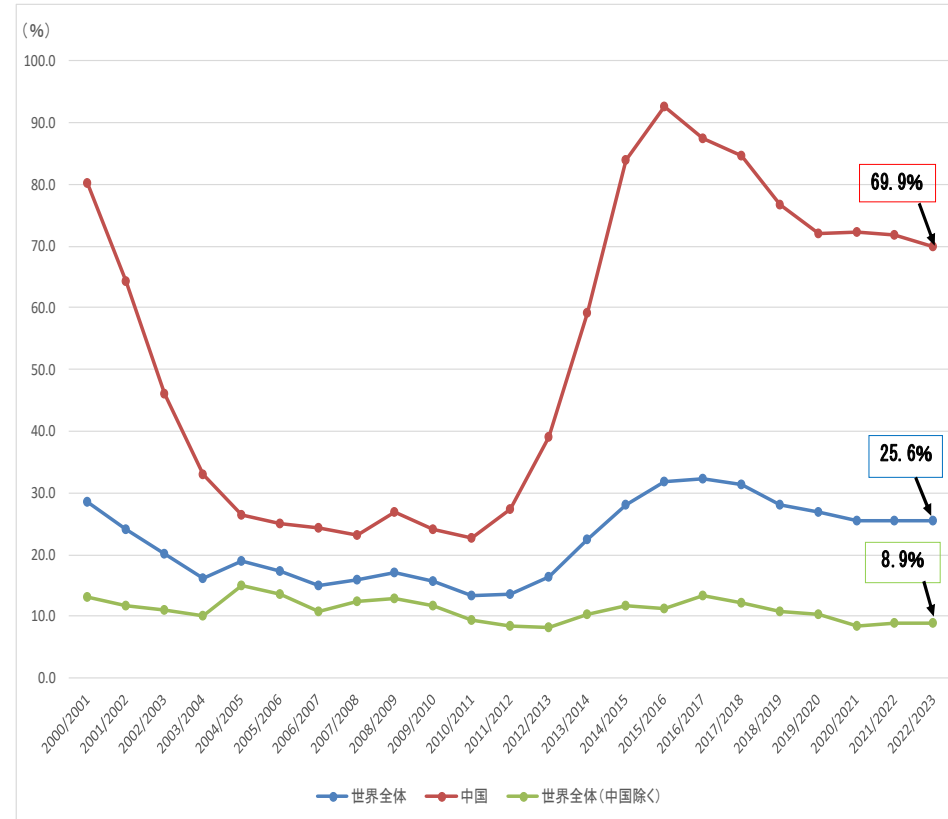
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(November 9, 2022)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

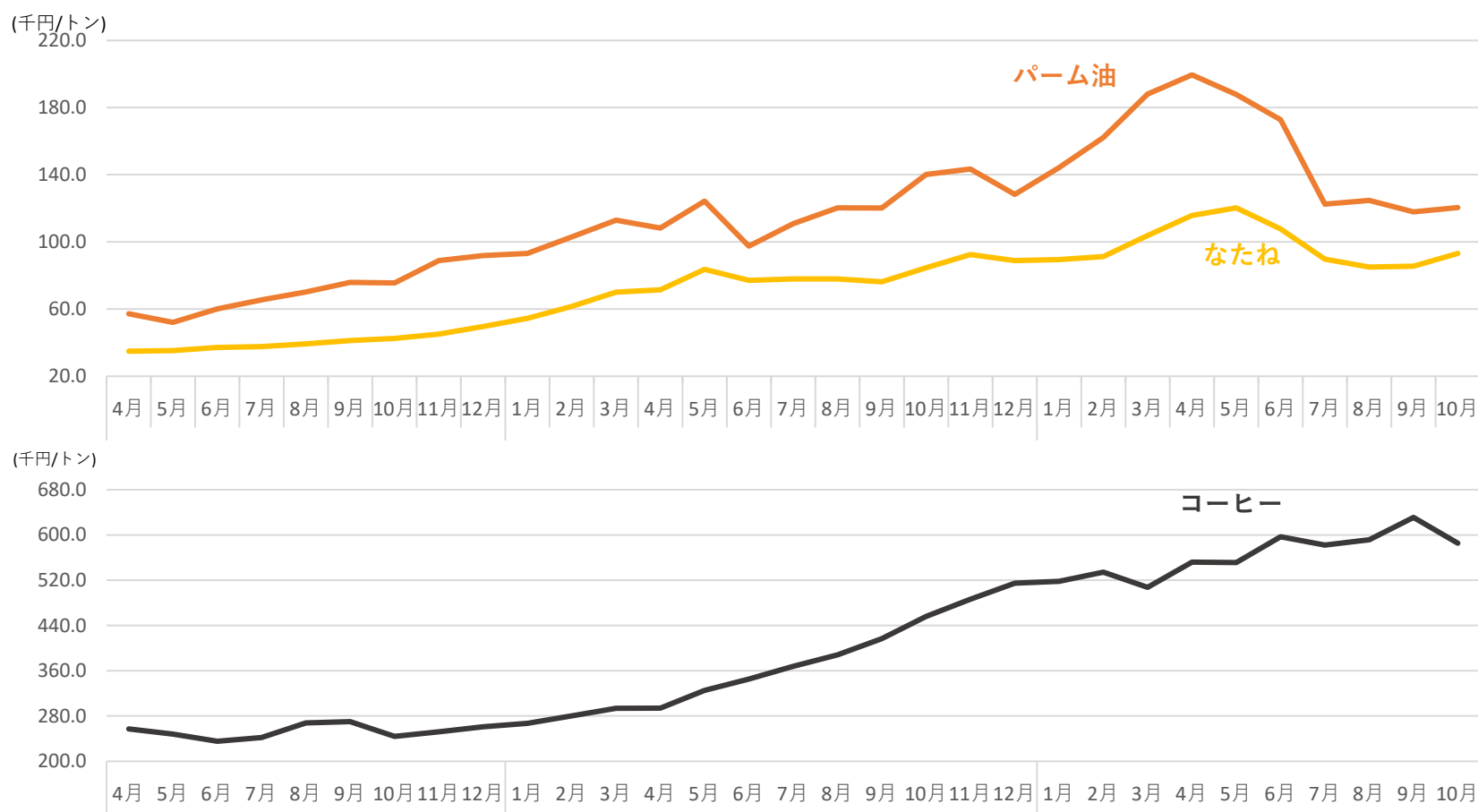
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（5月23日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。



2022年11月20日現在
□内は2020年4月以降
の最高値。

パーム油
120.4千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
93.1千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

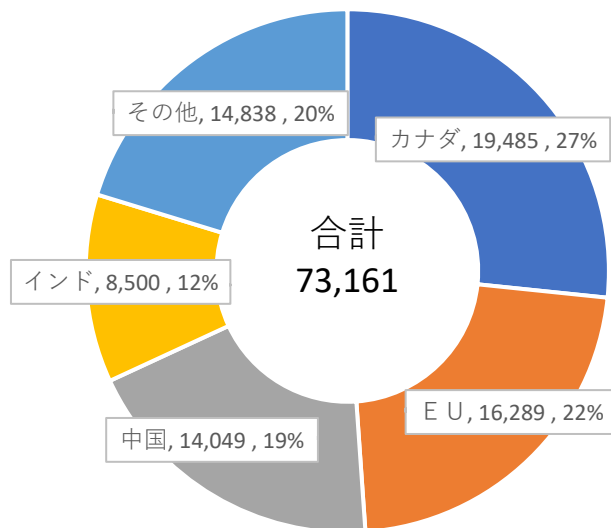
コーヒー
585.4千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

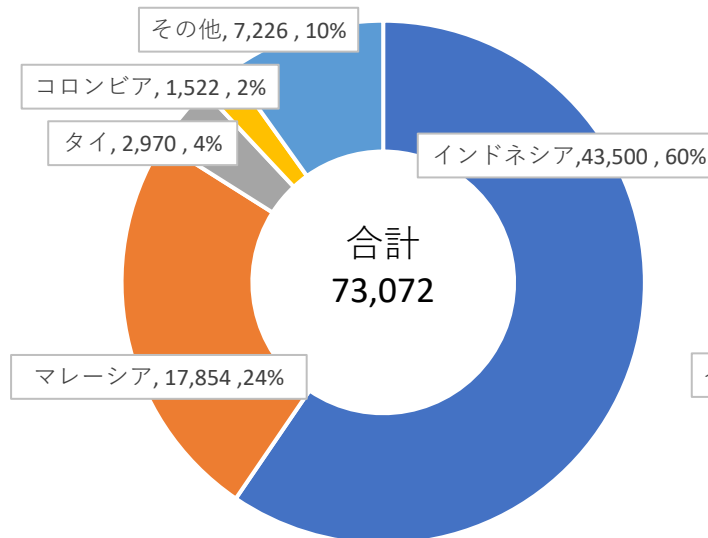
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



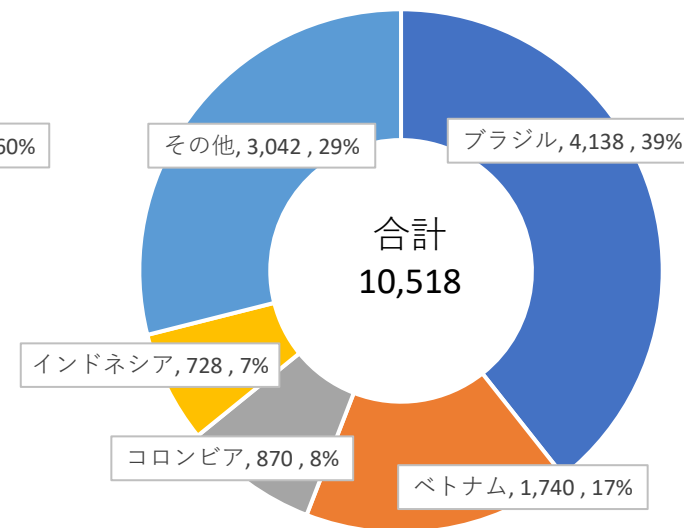
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	36.4%
ベトナム	100	25.0%
コロンビア	48	11.9%
その他	108	26.7%
合計	402	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年									
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年									
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシヤパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年									
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年10月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.8～160.2（前年同月比で－1.1％～35.6％）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）
（令和4年5月～令和4年10月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	107.5	107.9	111.9	114.4	113.8	113.7	14.2%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.1	110.0	113.7	114.9	112.4	112.3	11.3%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	104.0	104.7	104.9	105.1	106.7	108.3	6.2%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	135.4	139.2	145.8	150.4	156.8	160.2	35.6%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	101.0	99.8	99.9	100.1	103.4	103.6	4.4%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	126.1	125.0	125.2	126.5	127.0	133.7	19.0%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	105.3	104.0	106.2	106.6	113.2	117.1	19.0%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.5	99.3	99.1	99.4	98.7	98.8	-1.1%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	102.6	103.2	103.8	104.2	105.0	106.7	5.9%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省）
（令和4年5月～令和4年11月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	104.6	105.9	109.8	111.1	110.7	110.9	111.3	0.4%	13.3%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	110.0	111.2	111.2	110.0	110.0	110.6	0.5%	11.7%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	102.4	102.9	103.3	103.7	104.2	107.2	107.2	0.0%	6.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	130.8	132.7	139.1	148.3	156.8	160.6	161.2	0.4%	39.8%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	99.6	98.8	99.8	100.4	101.7	102.5	102.7	0.2%	3.9%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	117.2	118.3	117.2	118.3	116.9	126.2	128.9	2.1%	20.9%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	104.5	105.0	105.0	104.5	108.0	114.4	115.4	0.9%	23.3%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.3	99.3	99.0	99.3	98.6	98.6	98.6	0.0%	-1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2022年12月号（11月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）アジアからの需要増が牛肉輸出をけん引

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002489.html

（カナダ）総飼養頭数、干ばつなどを要因に減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002490.html

（EU）牛肉供給量の減少と価格の高騰により輸出量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002491.html

（豪州）労働力不足や牛群再構築により牛肉輸出量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002492.html

◆豚肉

（米国）22年8月の豚肉輸出量、日本向けが大幅に減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002503.html

（中国）需要期を迎え、豚肉価格は上昇傾向継続の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002504.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）生乳取引価格は20カ月連続で前月を上回るも乳製品価格は下降基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002493.html

（豪州）生乳生産量、引き続き前年割れで推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002505.html

（NZ）GDT価格、全粉乳を除く主要3品目で今年最安値を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002506.html

（アルゼンチン）生乳生産量は前年同期をわずかに上回る水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002507.html

◆飼料穀物

（世界）22/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度比微減見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002494.html

（世界）米国の下方修正も、南米での増産見込から期末在庫は上方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002508.html

（米国）22/23年度の世界の米国トウモロコシ、在庫率は10%を割り込む見込み

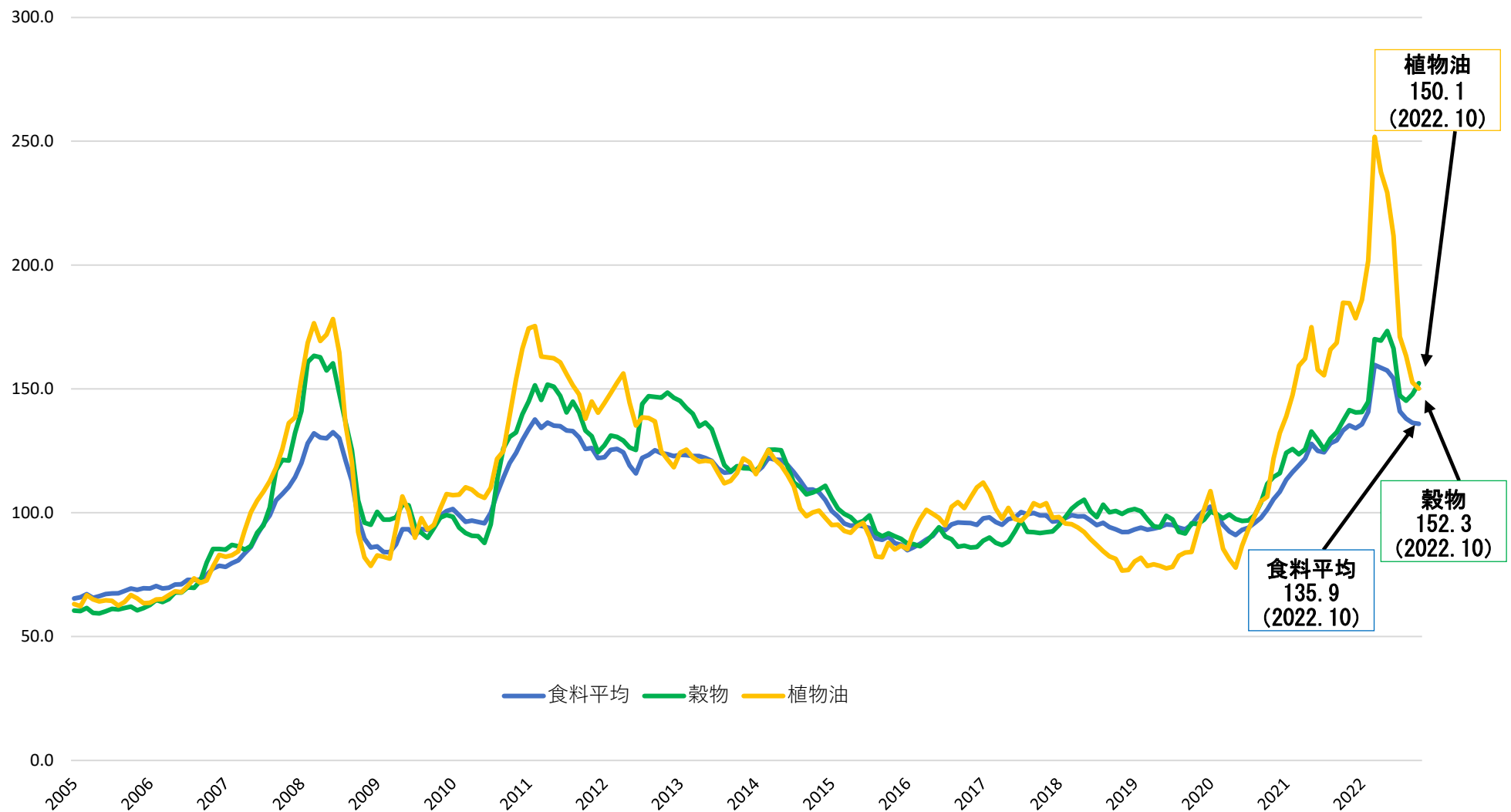
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002509.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002510.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.11)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・アルゼンチン、EU 等で下方修正されたものの、豪州、カザフスタン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

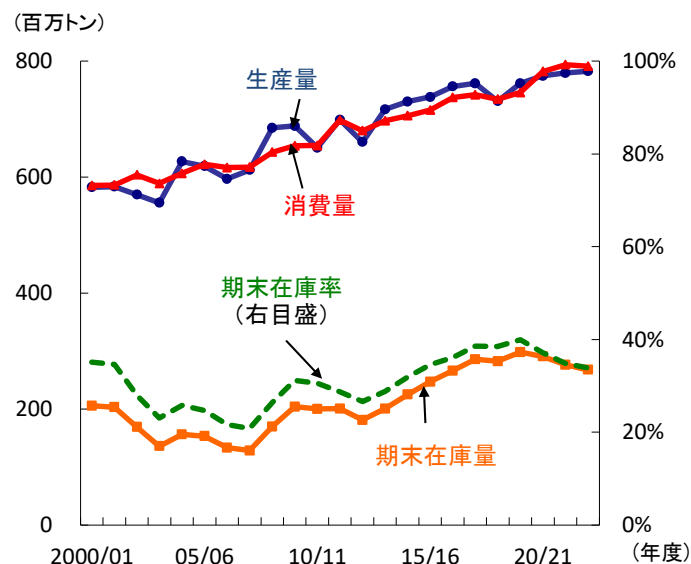
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・EU 等で上方修正されたものの、バングラデシュ、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出力 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・アルゼンチン等で下方修正されたものの、豪州、カザフスタン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



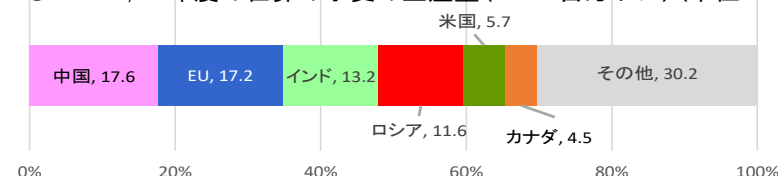
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

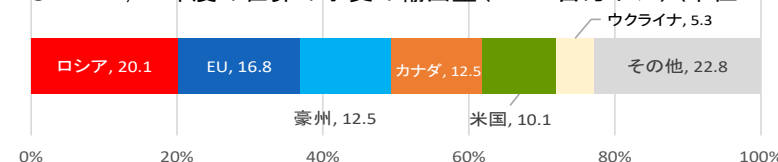
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.5	779.4	782.7	1.0	0.4
消 費 量	782.1	793.8	791.2	1.0	▲ 0.3
うち飼料用	158.1	160.9	156.4	0.9	▲ 2.8
輸 出 量	203.3	202.8	208.7	0.3	2.9
輸 入 量	195.4	198.0	202.6	▲ 1.3	2.3
期末在庫量	290.7	276.3	267.8	0.3	▲ 3.1
期末在庫率	37.2%	34.8%	33.9%	▲ 0.0	▲ 1.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 November 2022)

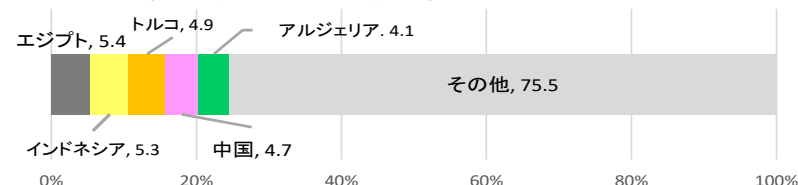
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(782.7百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出力(208.7百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(202.6百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の冬小麦の発芽進捗率は5年平均並の81%

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく44.9百万トンと前年度に比べ0.2%増加したものの、2003/04年度以降で2021/22年度に次ぎ少ない。

品種別の生産量は、冬小麦、春小麦、デュラム小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ、30.0百万トン、13.1百万トン、1.7百万トンの見込み。

冬小麦は、主要生産地の干ばつの影響で生産量が減少し、前年度に比べ13.6%減少(5年平均:33.9百万トン)。一方、春小麦、デュラム小麦は降雨過多による播種遅延があったものの、前年度の乾燥により減少した生産量から回復し、春小麦は前年度に比べ45.7%の増加(同:13.7百万トン)。また、デュラム小麦は同69.9%の増加(同:1.6百万トン)。

「Crop Progress」(2022.11.7、11.14)によれば、11月6日時点で2023/24年度冬小麦の主要生産18州の播種進捗率は92%となり、播種はほぼ終了した。また、11月13日時点の主要生産18州の発芽進捗率は、81%と前年度(80%)を上回るものの、5年平均(81%)並となっている。HRW(ハード・レッド・ウインター)の主要生産州の発芽進捗率は、テキサス州では75%と5年平均を4ポイント上回るものの、カンザス州で75%と5年平均を8ポイント下回っている。

また、干ばつが主要生産州のカンザス州等に広がっており、11月8日時点で冬小麦生産地域の約74%が干ばつ状況。このため、同月13日時点の主要生産地のカンザス州、オクラホマ州の作柄評価(やや良～良)の割合は、それぞれ24%、19%と前年度同期の61%、52%を大きく下回った。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.1百万トンと1972/73年度以降最低となる見込み。

米国产の輸出価格は主要輸出国に比べ価格競争力が弱く、2022/23年度の2022年6月から同年9月の輸出量は、前年度同時期に比べ4%減少。一方、10月の輸出量は、131.2万トンと前年度同時期114.9百万トンを上回った。10月の輸出先国は、日本(11.9%)、メキシコ(11.3%)の順。

なお、2022年1月から同年10月までの輸出量は1,770.6万トンと前年度同期を13.1%下回る。

期末在庫量は、前月に比べ0.1百万トン下方修正され、2008/09年度以降で最低の15.5百万トンの見込み。なお、期末在庫率は2014/15年度以降最低の30.6%。

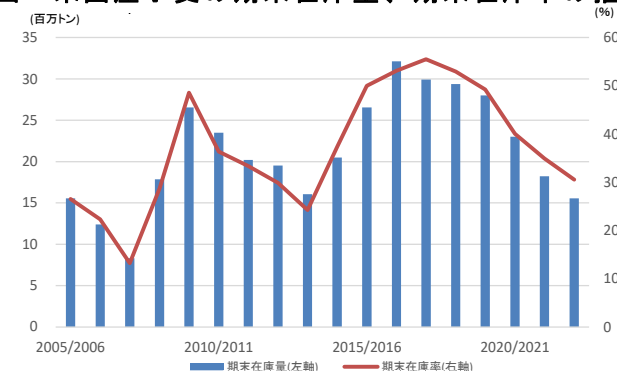
小麦一米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	44.9	-	0.2
消費量	30.4	30.4	29.8	0.1	▲2.1
うち飼料用	2.5	2.4	1.4	-	▲43.1
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	-	▲3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	-	26.3
期末在庫量	23.0	18.2	15.5	▲0.1	▲14.7
期末在庫率	40.0%	34.9%	30.6%	▲0.4	▲4.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	-	▲4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	-	5.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(9 November 2022)

図 米国产小麦の期末在庫量、期末在庫率の推移



資料:USDA「PS&D」(2022.11.9)をもとに農林水産省で作

図 米国产小麦の輸出先国別輸出量

2022年10月			2022年1月～10月		
国名	検証高(万トン)	シェア(%)	国名	累積検証高(万トン)	シェア(%)
日本	15.6	11.9	メキシコ	326.7	18.5
メキシコ	14.8	11.3	フィリピン	207.7	11.7
フィリピン	12.9	9.8	日本	189.5	10.7
韓国	12.3	9.4	ナイジェリア	111.0	6.3
イラク	10.5	8.0	韓国	102.2	5.8
その他	65.1	49.6	その他	833.5	47.1
合計	131.2	100.0	合計	1,770.6	100.0

注1. 10月の輸出検証高は、10月6、13、20、27日、11月3日の合計値

注2. 2022年累積輸出検証高は、2022年1月6日～11月3日の合計

資料:USDA Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals (2022年11月11日)より作成。

＜ カナダ ＞ 生産量は回復し、過去5年平均比14.3%増、品質は良好の見込み

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.11.18)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、34.7 百万トンの見込み。生産量は、収穫面積と単収の引き上げから、カナダ西部の干ばつにより生産量が減少した 2021/22 年度に比べ 55.6%増加する見込み(過去5年平均比 13.3%増)。

品種別には、普通小麦、デュラム小麦とも、前月予測からの変更はなく、それぞれ 28.6 百万トン、6.1 百万トンの見込み。前年度に比べ、普通小麦は、48.4%増加し(過去5年平均比 11.9%増)、デュラム小麦は 101.3%増加する見込み(過去5年平均比 20.6%増)。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、11 月 3 日時点のサンプル調査の結果、普通小麦は、サンプルの 93%が1～2等に格付けされ、カナダ・ウェスタン・レッド・スプリング(CWRS)の平均タンパク質含有率は、1等が14%、2等が13.6%である。デュラム小麦は、サンプルの82%(前年度同時期70%)が1～2等に格付けされ、平均タンパク質含有率はカナダ・ウェスタン・アンバー・デュラムの1等が14.3%である。

また、主要産地のサスカチュワン州政府の報告によれば、ハード・レッド・スプリング(HRS)の格付けは、1等が70%(過去10年平均39%)、2等が23%(同35%)を占めた。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2022/23 年度の消費量は前月予測からの変更はなく、9.0 百万トンの見込み。なお、USDAによれば、本年度は多くが良好な品質となる見込みから、飼料用小麦が不足する見込み。なお、飼料小麦の13%は米国産小麦で賄われているとみられる。

AAFCによれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 55.3%増加の 23.5 百万トン。そのうち、普通小麦は前月予測から 0.2 百万トン上方修正され 18.5 百万トンと前年度比 47.4%増、デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく 5.0 百万トンと、同 84.1%上回る見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23 年度(2022 年 8 月～2023 年 7 月)の 8～9 月の輸出量は普通小麦が 263.1 万トン、デュラム小麦は 35.5 万トンの計 298.6 百万トン。

輸出先国は、普通小麦が中国(20.1%)、日本(11.4%)、バングラデシュ(10.0%)、デュラム小麦は、イタリヤ(38.9%)、モロッコ(23.4%)の順。USDAによれば、期末在庫率は史上最低の 11.9%の見込み。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.4	22.3	35.0 (34.7)	-	57.0
消費量	9.1	10.0	9.1 (9.0)	-	▲ 9.0
うち飼料用	4.2	5.0	4.0 (4.6)	-	▲ 20.0
輸 出 量	26.4	15.1	26.0 (23.5)	-	71.8
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	6.0	3.7	4.2 (6.0)	-	13.6
期末在庫率	16.7%	14.6%	11.9% (18.5%)	-	▲ 2.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.19	10.00 (10.06)	-	8.8
単収(t/ha)	3.54	2.43	3.50 (3.45)	-	44.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(18 November 2022)

表 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量

〈普通小麦〉

2022年9月			2022年8月～2022年9月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
中国	31.3	19.2	中国	52.8	20.1
日本	17.3	10.6	日本	30.1	11.4
バングラデシュ	14.5	8.9	バングラデシュ	26.4	10.0
コロンビア	13.2	8.1	ペルー	18.6	7.1
ペルー	12.4	7.6	インドネシア	17.4	6.6
その他	73.9	45.4	その他	117.8	44.8
計	162.6	100.0	計	263.1	100.0

〈デュラム小麦〉

2022年9月			2022年8月～2022年9月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
イタリア	7.9	35.6	イタリア	13.8	38.9
モロッコ	6.1	27.5	モロッコ	8.3	23.4
米国	3.7	16.7	米国	6.3	17.7
ペルー	1.1	5.0	ペルー	2.0	5.6
ポルトガル	1.1	5.0	アラブ首長国連邦	1.1	3.1
その他	2.3	10.4	その他	4.0	11.3
計	22.2	100.0	計	35.5	100.0

注1: Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のデータ
注2 普通小麦の品種はNO.1-3Canada Western Red Spring No.1Canada Western Red Winter No.2Canada Eastern Red Spring No.2Canada Eastern Oter,
デュラムはCanada Western Amber Durum Others
資料: Canadian Grain Commission「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」をもとに作成。

＜ 豪州 ＞ 生産量は前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、史上 2 番目の 34.5 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、34.5 百万トンと史上最高の前年度(36.4 百万トン)を 5.1%下回るものの、史上 2 番目となる見込み。生育期当初に良好な生育条件に恵まれ、その後 10 月には平均を超える降雨があり、生育が進み、単収が上昇した。また、9 月、10 月の降雨で土壌水分量は十分となった。現在、主要生産地では深層の土壌水分量が平均から平均以上となっており、更に単収が上昇するとみられている。なお、豪州東部の一部では、生育期後半に洪水が発生したため、品質が低下する可能性がある。

GIWA(西オーストラリア州穀物団体)(2022.10.6)によれば、春の冷涼な天候で収穫の開始が遅れたものの、単収は予想を上回ると見られる。2022/23 年度の西オーストラリア州(WA 州)の小麦生産量は、前月予測を 0.5 百万トン上方修正され 12.6 百万トン(前年度 12.9 百万トン)の見込み。なお、中央部、南部の一部では降雨により更に収穫が遅れており、今後も降雨が続くと品質が低下する可能性がある。なお、穀物等全体の生産量は過去最高の 2021/22 年度を超えるとみられている。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2022.9.6)によれば、2022/23 年度の実生産州別の生産量は、WA 州では、史上最高であった前年度に比べ 14%減少の 11.0 百万トン。ニューサウスウェールズ州(NSW 州)では、前年度に比べ 20%減少するものの、過去 5 年平均を 50%上回る 10.2 百万トン。

【貿易情報・その他】USDA によれば、11 月 7 日時点の豪州産輸出価格(FOB)は、アジアの輸入需要が旺盛なことから、10 月 10 日時点の 376 ドル/トンから 20 ドル/トン上昇し、396 ドル/トン。

2022/23 年度の輸出量は、生産量の上方修正により、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、26.0 百万トン。前年度(27.5 百万トン)に比べ 5.6%減少するものの、前年度に次ぎ史上 2 番目の見込み。

豪州統計局によれば、2022 年 9 月の輸出量は 180.7 万トンと、前月(251.8 万トン)に比べ 28.2%減少。輸出先国は、インドネシア(23.6%)、中国(14.7%)、ベトナム(10.9%)の順。なお、ウクライナからの黒海経由の輸出が再開されたものの、3 年連続の豊作の見通しの豪州産穀物等への需要は高い。

また、2022 年 1 月から 9 月までの輸出量は前年同期(2044.1 万トン)を 9.4%上回る 2235.8 万トン。輸出先国は、中国(20.3%)、インドネシア(14.0%)の順。前年(1 月から 12 月)に 294.3 万トンであった中国向けの輸出量は、本年 9 月までにすでに 454.3 万トンまで増加している。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	31.9	36.4	34.5 (33.5)	1.5	▲ 5.1	
消 費 量	8.0	8.5	8.6 (8.5)	-	0.2	
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (4.9)	-	-	
輸 出 量	23.8	27.5	26.0 (25.2)	1.0	▲ 5.6	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	-	▲ 4.8	
期末在庫量	3.0	3.5	3.7 (3.7)	0.5	4.3	
期末在庫率	9.4%	9.7%	10.6% (10.9%)	1.2	0.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.64	13.04	13.10 (13.1)	-	0.5	
単収(t/ha)	2.52	2.79	2.63 (2.57)	0.11	▲ 5.7	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC 「Grain Market Report」(20 October 2022)

写真：豪州東部の NSW 州の小麦圃場(2022. 11. 3)



ニューサウスウェールズ州リートン近郊で 10 月の降雨量が 120 mm を超えたため、綿さび病対策として農薬を散布している。
10 月に入り、多雨と低温により、生育が遅れ、収穫が例年より 3 週間遅れている。

表 豪州の小麦輸出量及び輸出先国

2022年9月			2022年1月～9月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
インドネシア	42.7	23.6	中国	454.3	20.3
中国	26.5	14.7	インドネシア	313.7	14.0
ベトナム	19.7	10.9	フィリピン	253.3	11.3
日本	15.2	8.4	ベトナム	254.9	11.4
マレーシア	15.1	8.4	韓国	145.7	6.5
その他	61.5	34.0	その他	813.9	36.4
合計	180.7	100.0	合計	2,235.8	100.0

資料：豪州統計局の資料をもとに農林水産省で作成

< EU27+英国 > 2023/24 年度の冬小麦の生育状況は大部分のEU諸国で良好

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.10.27)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べわずかに上方修正されたものの、前年度に比べ 1.8%減少の 135.5 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、フランス等で下方修正されたものの、ポーランド等で上方修正されたことから、前月予測に比べ 0.1 百万トン上方修正の 128.2 百万トン。デュラム小麦は、スペイン等で下方修正されたことから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正の 7.3 百万トン。

また、USDA によれば、EU27 の生産量は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、134.3 百万トン、英国の生産量は前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、15.4 百万トン。EU27 と英国の生産量の合計は 149.7 百万トンの見込み。

EU 諸国では、2023/24 年度の冬小麦の播種が開始されている。冬小麦の生育は、イタリア中部、北部を除き、欧州の大部分で降雨があり順調である。

フランスアグリメールによれば、11 月 7 日現在、2023/24 年度のフランスの播種進捗率は、普通小麦が前年度同時期 86%を上回る 92%、デュラム小麦が同 36%を上回る 50%。発芽進捗率は、普通小麦が前年度同時期 61%を上回る 76%、デュラム小麦は同 4%を上回る 13%である。また、作柄状況(とても良い～良い)の評価は、普通小麦が前年度同時期の 99%とほぼ同程度の 98%。

【貿易情報・その他】USDA によれば、干ばつによるとうもろこしの減産から、EU27 における小麦の飼料用需要は前月予測に比べ、0.5 百万トン上方修正され 45.5 百万トン。また、輸入量は、前月予測に比べ、0.5 百万トン上方修正され 6.0 百万トンの見込み。

EU27 の輸出量は、前月予測からの変更はなく 35.0 百万トンの見込み。7 月の高温乾燥による生産量の減少も、ウクライナの輸出減少分が EU 産にシフトし前年度に比べ 9.7%増加する見込み。

欧州委員会によれば、2022/23 年度(2022 年 7 月から 2023 年 6 月)のうち、2022 年 8 月の輸出量は、普通小麦が 421.4 万トン(前年度同月 348.6 万トン)、デュラム小麦が 7.0 万トン(同 8.4 万トン)。

輸出先国は、普通小麦がアルジェリア(19.6%)、エジプト(8.5%)、デュラム小麦がチュニジア(58.1%)、リビア(15.9%)の順となっており、輸出先はアフリカ諸国が中心となっている。また、英国の輸出量は、EU27 ヶ国向けの輸出量の増加により前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、1.3 百万トンの見込み。なお、EU27 の期末在庫率は史上最低の 9.5%の見込み。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	136.4	152.3	149.7 (148.8)	0.4	▲ 1.7	
消 費 量	118.2	123.7	125.1 (123.2)	0.7	1.1	
うち飼料用	48.5	52.4	53.3 (50.7)	0.7	1.7	
輸 出 量	30.2	32.7	36.3 (37.6)	0.3	10.9	
輸 入 量	8.6	7.2	7.8 (7.3)	0.3	7.7	
期末在庫量	12.1	15.2	11.4 (13.7)	▲ 0.3	▲ 25.3	
期末在庫率	8.2%	9.7%	7.1% (8.5%)	▲ 0.1	▲ 2.7	

(参考)

収穫面積(百万ha)	22.97	24.25	24.25 (25.91)	▲ 1.80	-	
単収(t/ha)	5.94	6.28	6.17 (5.74)	▲ 0.02	▲ 1.7	

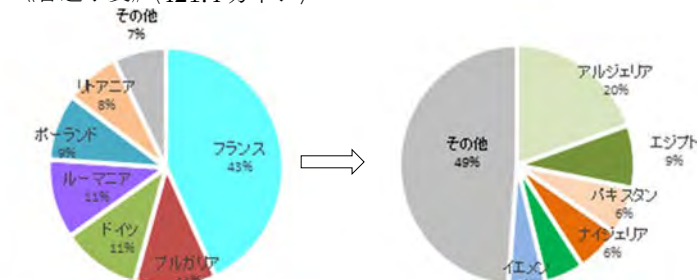
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)

IGC 「Grain Market Report」(20 October 2022)

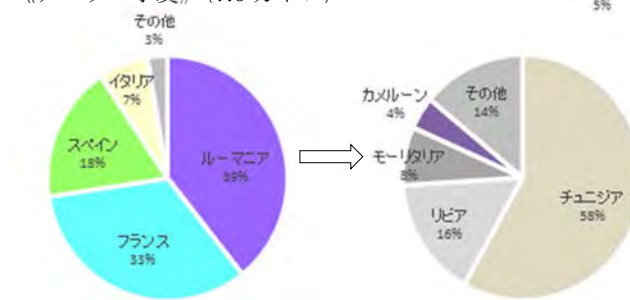
表内及び () 内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ

図 EU27 ヶ国の普通小麦、デュラム小麦の輸出元国と輸入先国 (2022 年 8 月)

《普通小麦》〈421.4 万トン〉



《デュラム小麦》〈7.0 万トン〉



EC(欧州委員会)「Cereals exports and imports」(2022.10.30)をもとに農林水産省で作成。

＜ 中国 ＞2022/23 年度の小麦生産量は、史上第 1 位の 138 百万トン

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.11.4)によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 1.1%増加の 138.4 百万トン(史上最高)の見込み。作期別には、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、生産量はそれぞれ 131.9 百万トン(対前年度 0.4%増)、6.5 百万トン(同 17.7%増)の見込み。主要生産省別の生産量は、冬小麦が河南省 37.6 百万トン(生産量シェア:28.5%)、山東省 26.4 百万トン(同 20.0%)、安徽省 17.2 百万トン(同 13.0%)である。

中央气象台によれば、2023/24 年度の冬小麦の播種は、全国の冬小麦生産地で十分な土壌水分や晴天に恵まれたことから、2023/24 年度の冬小麦の播種と発芽は順調に進んでいる。農業農村部によれば、11 月 14 日現在、冬小麦の播種進捗率は 95.4%で、降雨過多により遅れた前年度同時期(93%)を上回った。中国糧油情報センターによれば、冬小麦の播種面積は前年度並みの見込み。

現地情報会社によれば、中国政府からの農業資材補助金の給付や国内小麦価格の上昇による農家収益の向上のため、栽培コスト増による 2023/24 年度の播種面積への影響は少ないと見られる。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月からの変更はなく、前年度(9.6 百万トン)から 18.4%減少の 7.8 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2022 年 9 月の輸入量は、前年度同期(63.7 万トン)を 42.9%下回る 36.4 万トン。輸入先国は、豪州が 31.1 万トン(85.3%)で大部分を占めている。中国糧油情報センターによれば、本年度は中国産小麦の豊作と良好な品質から輸入小麦に対する需要が減少し、前年同月に比べ 9 月の輸入量はかなり減少した。また、2022 年 1 月～9 月の輸入量は、前年同期(756.7 万トン)を 13.2%下回る 656.6 万トン。輸入先国は、豪州、フランス、カナダの順で、輸入シェアはこの 3ヶ国で 99.7%。一方、本年 2 月にロシア産小麦の輸入に関する植物検疫上の地域限定の撤廃に合意しているものの、ロシア産の輸入は 0.2 万トンと前年度(4.7 万トン)を下回っている。

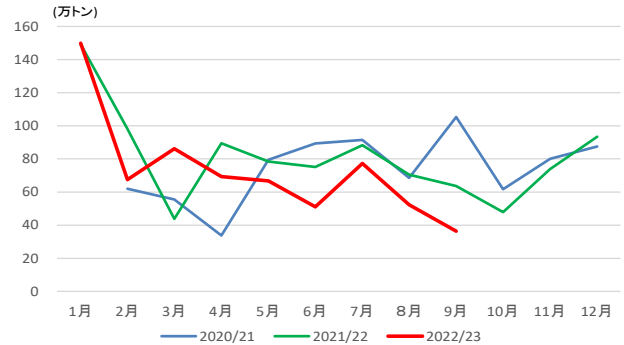
農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022 年 9 月号」によれば、9 月は、気温の低下に伴い小麦粉やふすまの需要が増加したため、製粉業者の小麦仕入量は比較的高水準を維持。また、卸売業者は、資金と倉庫スペースの確保から積極的に小麦を売却し、秋の穀物の買付に備えている。小麦の供給量は十分で、小麦価格は全体的に安定した。今後は、国内の小麦需給に余裕があるものの、国内小麦価格は高水準を保ちながら小幅上下すると見られる。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	134.3	137.0	138.0 (138.0)	-	0.8
消費量	150.0	148.0	144.0 (139.6)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (25.0)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.1)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	9.5 (8.2)	-	▲ 0.7
期末在庫量	144.1	141.8	144.4 (138.5)	-	1.8
期末在庫率	95.6%	95.2%	99.6% (98.5%)	-	4.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.60 (23.6)	-	0.1
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.85 (5.84)	-	0.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC 「Grain Market Report」(20 October 2022)

図 中国の小麦月別輸入量の推移



資料：中国海関統計(2022. 10. 20)をもとに農林水産省で作成資料

表 中国の小麦輸入量及び輸入先国

2022年9月			2022年1月～2022年9月			2021年1月～2021年9月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	31.1	85.3	豪州	451.6	68.8	カナダ	244.7	32.3
カナダ	4.9	13.6	フランス	144.5	22.0	米国	231.0	30.5
米国	0.4	1.1	カナダ	58.2	8.9	豪州	187.5	24.8
ロシア	0.0	0.0	カザフスタン	1.7	0.3	フランス	65.4	8.6
-	-	-	米国	0.4	0.1	カザフスタン	16.8	2.2
-	-	-	ロシア	0.2	0.0	ウズベキスタン	6.6	0.9
-	-	-	-	-	-	ロシア	4.7	0.6
その他	-	-	その他	-	-	その他	0.0	0.0
計	36.4	100.0	計	656.6	100.0	計	756.7	100.0

資料：中国海関統計(2022. 10. 20)をもとに農林水産省で作成資料

＜ ロシア ＞ 生産量は史上最高の 91.0 百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく 91.0 百万トンと、前年度に比べ 21.1%増加し、史上最高となる見込み。

作期別の生産量は、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ 68.0 百万トン、23.0 百万トンの見込み。前年度に比べ、生産量は冬小麦が 30.3%増加し、春小麦が 0.2%増加した。

ロシア農業省の速報値によれば、11 月 8 日時点で、収穫済み面積は 29.2 百万ヘクタール、収穫進捗率は 99.1%となり、重量調整前の収穫量は 104.9 百万トン(前年度同時期 34.5%増)である。

一方、同省によれば、11 月 8 日時点で、2023/24 年度の冬穀物の播種済み面積は、対前年度同期 3.6%減の 17.5 百万ヘクタール。中央連邦管区の黒土地帯では秋の長雨により冬穀物の播種作業が遅延し、一部で播種計画が未達になる見込み。来年、未播種の圃場では春穀物が播種されるとみられる。現地情報会社によれば、2023/24 年度の冬小麦の生育段階は発芽から分けつ期で、10 月末には気温の低下で生長が停止した。作柄は、良好から並となっている。

なお、ロシア連邦政府は、各地方政府に 2023/24 年度も 2022/23 年度並の生産量や播種面積の維持を勧告した。現地の農業企業では、播種面積の縮小の予定はないものの、肥料等の値上がりにより、栽培コストが前年度に比べ 40%上昇する見込みの一方、穀物価格の低迷により収益の確保が難しいとみられている。ロシア穀物同盟では、収益率の低下から播種面積縮小の可能性もあるとみている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく前年度に比べ 27.3%増加の 42.0 百万トン。11 月 7 日時点のロシア産輸出価格(FOB)は、黒海の港湾情勢の不安定さから、10 月 10 日から 7 ドル/トン下落し主要輸出国では最低の 320 ドル/トン(輸出税含む)。

現地情報会社によれば、10 月の輸出量は 471.6 百万トンで前年度同月(335.3 万トン)を 40.7%上回ったものの、2022/23 年度のうち、2022 年 7 月から同年 10 月の輸出量は 1456.4 万トンで過去 3 年の同時期平均(1532.1 万トン)を 4.9%下回った。同期間の輸出先国は、エジプト(17.2%)、トルコ(16.6%)、イラン(11.5%)。2022/23 年度に入った当初、輸出ペースは比較的低調であったものの、価格競争力が高いことから今後のロシアの輸出量は増加すると見られている。

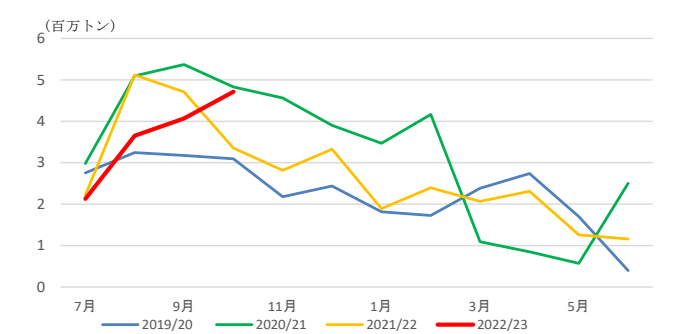
ロシア農業省によれば、2023 年 2 月 15 日から同年 6 月 30 日に設定される予定の穀物輸出枠については、穀物全体(小麦を含む)の輸出枠量を 2,550 万トンにすることで検討がされている。

小麦－ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)
(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	85.4	75.2	91.0 (95.4)	-	21.1
消 費 量	42.5	42.8	45.0 (45.8)	-	5.3
うち飼料用	19.0	19.5	21.0 (20.5)	-	7.7
輸 出 量	39.1	33.0	42.0 (36.6)	-	27.3
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	11.4	11.1	15.4 (24.5)	-	38.8
期末在庫率	13.9%	14.6%	17.7% (29.7%)	-	3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	28.70 (28.7)	-	3.9
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.17 (3.32)	-	16.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC 「Grain Market Report」(20 October 2022)

図: ロシア産小麦の月別輸出量の推移



資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表: ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2022年10月)			2022/23年度 (2022年7月～2022年10月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	91.3	19.4	エジプト	250.7	17.2
エジプト	65.2	13.8	トルコ	241.3	16.6
バングラデシュ	37.9	8.0	イラン	168.1	11.5
サウジアラビア	28.2	6.0	サウジアラビア	112.7	7.7
アルジェリア	25.9	5.5	カザフスタン	100.2	6.9
イラン	24.9	5.3	スーダン	45.6	3.1
スーダン	24.9	5.3	バングラデシュ	43.2	3.0
その他	173.3	36.7	その他	494.6	34.0
計	471.6	100.0	計	1,456.4	100.0

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞2023/24 年度の冬小麦の播種進捗率は 91.3% (11 月 7 日時点)

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、20.5百万トンの見込み。ロシアの侵攻により、前年度に比べ、収穫面積が29.1%、単収が12.4%減少し、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)に比べ37.9%減少、過去5年平均に比べ26.6%減少する見込み。

ウクライナ農業政策食料省(2022.11.11)によれば、2022/23年度の小麦全体の収穫面積は4.70百万ヘクタール(前年度7.00百万ヘクタールに比べ32.7%減)、収穫量は19.4百万トン(同32.2百万トン、40.3%減)、単収は4.12トン/ヘクタール(同4.62トン/ヘクタール、0.5ポイント減)。

また、同省によれば、11月7日時点で、2023/24年度の冬小麦の播種済面積は3.64百万ヘクタールで播種進捗率は91.3%となった。なお、播種予定面積は前年度(6.69百万ヘクタール)を40.4%下回る3.99百万ヘクタール。生育状況は、10月末時点で、主産地のウクライナ東部で気温が低い状態が継続したため3～4週間程度生長が遅れている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ41.6%減少の11.0百万トンの見込み。

現地情報会社によれば、10月の小麦輸出量は前月に比べ17.3万トン増加したものの、前年度同月比では42.7%減の195.7万トン。また、2022/23年度のうち、2022年7月から同年10月の輸出量は、黒海の港湾からの輸出再開で輸出量が増加したものの、前年度同期に比べ59.1%減の499.7万トン。

なお、市場関係者によれば、2022/23年度の小麦のタンパク質含有量が低く、タンパク質含有量が11.5%とされる標準的な輸出契約の要件への懸念が生じるとの見方もある。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、10月31日現在、合意に基づく8月から10月までの黒海港湾からの輸出量は972.9万トン。そのうち小麦の輸出量は276.2万トンと全体の28.4%。輸出先国は、スペイン72.6万トン(26.3%)、トルコ49.9万トン(18.1%)、バングラデシュ26.9万トン(9.7%)の順。USDAによれば、ここ数ヶ月、港湾能力が限られる中、ウクライナ産とうもろこしや、豊作が見込まれるロシア産小麦との競合が小麦輸出の制約要因となっている。なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、11月19日で当初設定された120日間の期限を迎えたが、再度120日延長(2023年3月19日まで)された。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	25.4	33.0	20.5 (21.5)	-	▲ 37.9
消費量	8.7	10.0	10.7 (8.2)	-	7.0
うち飼料用	2.6	4.0	5.5 (2.9)	-	37.5
輸 出 量	16.9	18.8	11.0 (13.0)	-	▲ 41.6
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 28.6
期末在庫量	1.5	5.8	4.7 (7.6)	-	▲ 18.9
期末在庫率	5.9%	20.1%	21.7% (35.7%)	-	1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.25 (5.5)	-	▲ 29.1
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.90 (3.90)	-	▲ 12.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC 「Grain Market Report」(20 October 2022)

写真：分けつ期を迎えた冬小麦 (2022. 11. 2)



約 2000ha の圃場で冬小麦の播種が行った。本年度は、越冬のストレスを少なくするため春に施肥を行う以外は、肥料は高価なため、施肥は行わない予定。今のところ、冬作物は、水分も十分にあり、非常に良好な状態。

表：ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国 (輸出量:万トン、シェア%)

2022/23年度 (2022年10月)			2022/23年度 (2022年7月～2022年10月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	32.2	16.5	トルコ	108.9	21.8
スペイン	31.3	16.0	ルーマニア	92.0	18.4
ルーマニア	27.9	14.3	スペイン	69.2	13.8
ポーランド	14.8	7.6	ポーランド	25.4	5.1
インドネシア	14.0	7.2	バングラデシュ	21.1	4.2
ベトナム	11.6	5.9	イタリヤ	18.5	3.7
アルジェリア	9.3	4.8	レバノン	18.2	3.6
その他	54.6	27.9	その他	146.4	29.3
計	195.7	100.0	計	499.7	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・米国等で上方修正も、EU、南アフリカ等で下方修正され、前月から下方修正された。

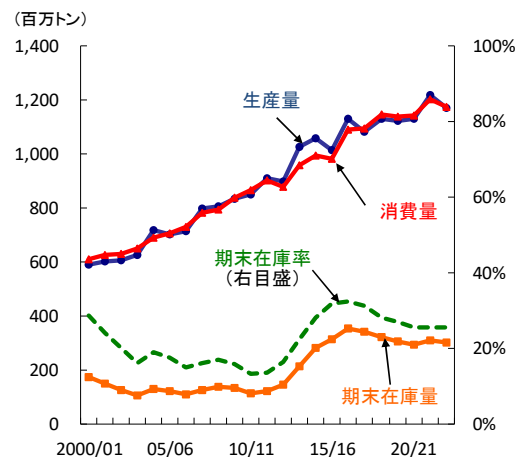
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・EU、ベトナム等で下方修正も、米国、カナダ等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・南アフリカで下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022.11.9）をもとに農林水産省にて作成

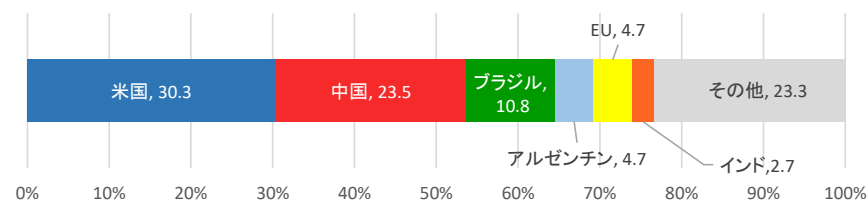
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

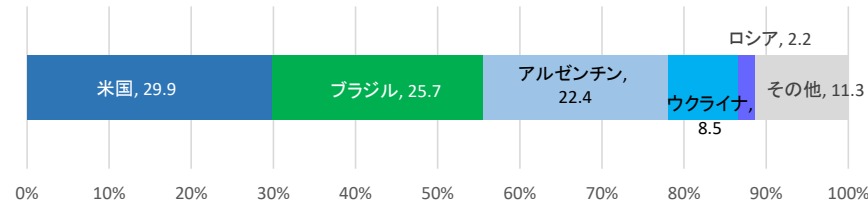
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.3	1,217.5	1,168.4	▲ 0.3	▲ 4.0
消費量	1,144.0	1,202.6	1,175.3	0.8	▲ 2.3
うち飼料用	724.0	752.0	740.3	0.1	▲ 1.5
輸 出 量	182.6	201.8	182.7	▲ 0.3	▲ 9.5
輸 入 量	184.9	183.9	177.6	▲ 1.4	▲ 3.4
期末在庫量	292.8	307.7	300.8	▲ 0.4	▲ 2.2
期末在庫率	25.6%	25.6%	25.6%	▲ 0.1	0.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 November 2022)

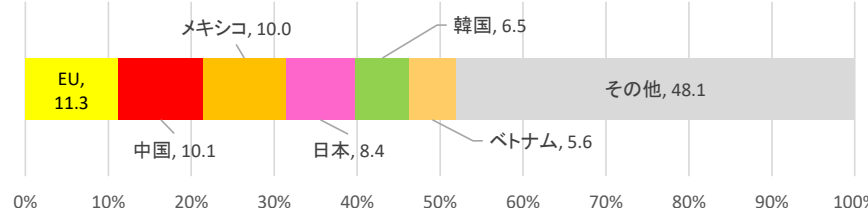
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,168.4 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(182.7 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(177.6 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、11月1日時点の作柄を踏まえ、イリノイ州、アイオワ州、インディアナ州等中西部の主産州の単収の上方修正により前月予測から0.9百万トン上方修正されたものの、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から前年度より7.6%減の353.8百万トンの見込み。なお、収穫面積は、2015/16年度以来の低水準の見込み。

USDA「Crop Progress」（2022.11.14）によれば、収穫期の天候に恵まれ、主要18州における収穫進捗率は93%と前年度同期（90%）及び過去5年平均（85%）より進んでいる。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の上方修正に伴い、飼料用消費量が前月予測から0.6百万トン上方修正されたものの、前年度より3.7%減の305.5百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より13.0%減の54.6百万トンの見込み。

USDA「Feed Outlook」（2022.11.14）によれば、ミシシッピ川流域の降雨不足により、10月の水位が1927年の観測開始以来の最低水準となるなど、はしけ輸送に一部支障が出ており、10月のはしけ運賃が前年の3倍程度に上昇した。

USDAによれば、2022年輸出検証高（2022年1月6日～11月3日）は、46.2百万トンであり、内訳は中国（13.7百万トン）、メキシコ（12.2百万トン）、日本（8.5百万トン）、コロンビア（2.8百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から0.3百万トン上方修正されたものの、生産量の大幅な減少から前年度より14.2%減の30.0百万トンで2012/13年度以来最低の見込み。期末在庫率は8.3%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

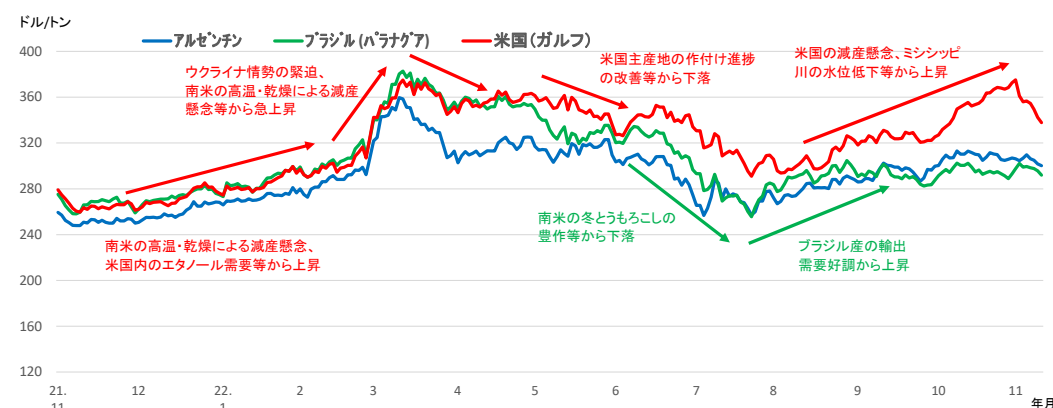
とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年9月～23年8月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	358.5	382.9	353.8	0.9	▲ 7.6
消 費 量	306.7	317.1	305.5	0.6	▲ 3.7
うち飼料用	142.4	145.2	134.6	0.6	▲ 7.3
エタノール用等	127.7	135.3	134.0	－	▲ 1.0
輸 出 量	69.8	62.8	54.6	－	▲ 13.0
輸 入 量	0.6	0.6	1.3	－	104.8
期末在庫量	31.4	35.0	30.0	0.3	▲ 14.2
期末在庫率	8.3%	9.2%	8.3%	0.1	▲ 0.9
（参考）					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.72	－	▲ 5.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.82	0.03	▲ 2.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（9 November 2022）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より8.6%増の126.0百万トンで史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.11.9）によれば、現在作付け中の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、単収の増加により、前年度比12.5%増の28.2百万トンの見込み。一方、大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこしの生産量は、前年度比11.9%増の98.2百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比12.0%増の126.4百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。

11月上旬から中旬にかけて、多くの産地で平年以下の降水量となっている。南部のパラナ州で11月7日現在、2022/23年度の夏とうもろこしの作付進捗率は93%と前年度同期（98%）より遅れている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で11月17日現在、夏とうもろこしの作付進捗率は80%と過去5年平均（84%）より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より5.5%増の77.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より5.6%増の47.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～10月の輸出量は31.5百万トンで、前年同期（14.6百万トン）と比べ2.2倍となっている。内訳は、1位がイラン5.2百万トン、2位が日本3.7百万トン、3位がエジプト3.6百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が影響を受けており、代替としてブラジル産の中東・EU向け輸出が大幅に増加した。なお、10月の輸出量は6.8百万トンで、前年同月（1.8百万トン）と比べ、3.8倍となっている。

なお、11月2日に中国海関（税関）がブラジル産とうもろこしの対中輸出業者のリストを更新したとの報道があり、早ければ本年末にも対中国向け輸出が開始されるとみられている。

※報道によれば、11月23日付けで対中国向け輸出が開始された模様。

とうもろこし－ブラジル

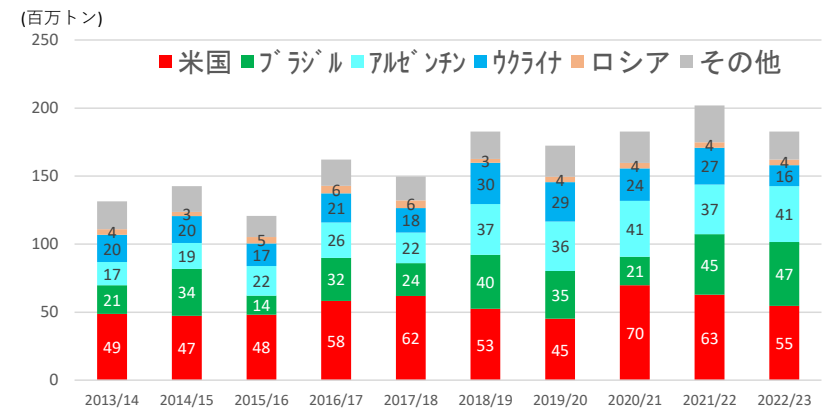
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	87.0	116.0	126.0 (123.1)	－	8.6	
消 費 量	70.0	73.0	77.0 (77.6)	－	5.5	
うち飼料用	59.5	62.0	65.5 (55.5)	－	5.6	
輸 出 量	21.0	44.5	47.0 (44.6)	－	5.6	
輸 入 量	2.9	2.3	1.3 (0.5)	－	▲ 43.5	
期末在庫量	4.2	5.0	8.3 (6.1)	－	66.7	
期末在庫率 (参考)	4.6%	4.2%	6.7% (5.0%)	－	2.4	
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.80)	－	4.1	
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55 (5.65)	－	4.3	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC「Grain Market Report」(20 October 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.11.9)のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加により、前年度より 6.8%増の 55.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.11.17）によれば、2022/23 年度の作付進捗率は 24%で、過去 5 年平均（36%）より 12 ポイント遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 4.8%減の 14.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 12.3%増の 41.0 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1 ～ 9 月の輸出量は 30.2 百万トンで、前年同期（31.5 百万トン）より 4.0%減。内訳は、1 位がベトナム 4.4 百万トン、2 位が韓国 4.0 百万トン、3 位がエジプト 2.4 百万トン。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7 %から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣がとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。11 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンと設定されている。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	52.0	51.5	55.0 (60.6)	-	6.8	
消 費 量	13.5	14.7	14.0 (20.7)	-	▲ 4.8	
うち飼料用	9.5	10.8	10.0 (15.8)	-	▲ 7.4	
輸 出 量	40.9	36.5	41.0 (41.0)	-	12.3	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.4)	-	-	
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.8)	-	-	
期末在庫率	2.2%	2.9%	2.7% (4.5%)	-	▲ 0.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.40	7.00 (8.20)	-	▲ 5.4	
単収(t/ha)	7.94	6.96	7.86 (7.40)	-	12.9	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC 「Grain Market Report」(20 October 2022)

写真：北部サンタフェ州のとうもろこしの圃場風景
(11 月 6 日撮影)

10 月中旬に作付け。収穫は 2023 年 3 月前半の予定。



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より0.5%増の274.0百万トンで史上最高の見込み。なお、政府補助金による大豆生産奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積は減少する見込み。

中国中央气象台によれば、11月上旬現在、東北地区の春とうもろこし、河南省等の夏とうもろこしの収穫はすでに終了。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より17.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～9月の輸入量は18.5百万トンで、前年同期比で26.0%減。内訳は、米国産13.3百万トン（72%）、ウクライナ産4.9百万トン（27%）。5月以降、前年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。（右図参照）

なお、11月2日に中国海関（税関）が従来ほとんど輸入のなかったブラジル産とうもろこしの輸出業者のリストを更新したとの報道があり、早ければ本年末にも輸入が開始されるとみられている。※報道によれば、11月23日付けで輸出が開始された模様。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年9月号」によると、9月の国内流通価格は、2,920 元/トンと前月（2,800 元/トン）から上昇。主な要因は、9月は一部地域で新穀とうもろこしが市場に出荷され始めたものの、本年は肥料・地代の高騰により作付けコストが大幅に上昇した上に、養豚収益の回復による飼料用消費量が増加したためである。また、9月の輸入価格は、米国の生産量の下方修正、欧州の干ばつによる減産を受けて、3,060 元/トンと前月（2,860 元/トン）から上昇。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要。

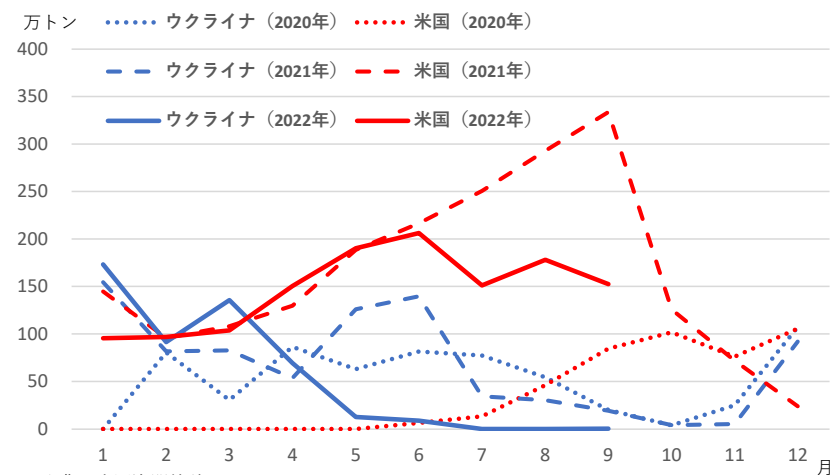
とうもろこし—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.7	272.6	274.0 (275.3)	-	0.5	
消 費 量	285.0	291.0	295.0 (307.5)	-	1.4	
うち飼料用	203.0	209.0	214.0 (205.2)	-	2.4	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	29.5	21.9	18.0 (19.0)	-	▲ 17.7	
期末在庫量	205.7	209.1	206.1 (175.0)	▲ 0.1	▲ 1.4	
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.9% (56.9%)	▲ 0.0	▲ 2.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00 (43.00)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.37 (6.40)	-	1.3	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC「Grain Market Report」(20 October 2022)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より4割減

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、燃料や肥料等の生産資材不足もあり、収穫面積及び単収の減少から、史上最高の生産量となった前年度より25.2%減の31.5百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、11月17日時点で、収穫済面積は2.1百万ヘクタール、収穫量12.3百万トン、収穫進捗率は50%となっている。

USDA「Feed Outlook」(2022.11.14)によれば、農家は燃料費不足と保管能力の減少に直面しているため、一部のとうもろこしは未収穫のままとなるとみられている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の減少に伴い、前年度より6.1%減の10.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より42.6%減の15.5百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省発表によれば、10月の輸出量は232万トンで、前月(226万トン)に比べ2.5%増。2021/22年度(2021年10月～2022年9月)の累計輸出量は、25.6百万トンで、2020/21年度(23.9百万トン)に比べ7.3%増。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された8月1日から10月末までの黒海港湾からのとうもろこし輸出量は419万トン、輸出先国は、スペイン(86万トン)、イタリア(60万トン)、トルコ(46万トン)等である。

11月17日に、11月19日に期限を迎えるウクライナからの穀物輸出再開に関する4者合意の120日間の延長が決定した。

また、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.2倍の9.9百万トンの見込みで、在庫が積み上がっている。

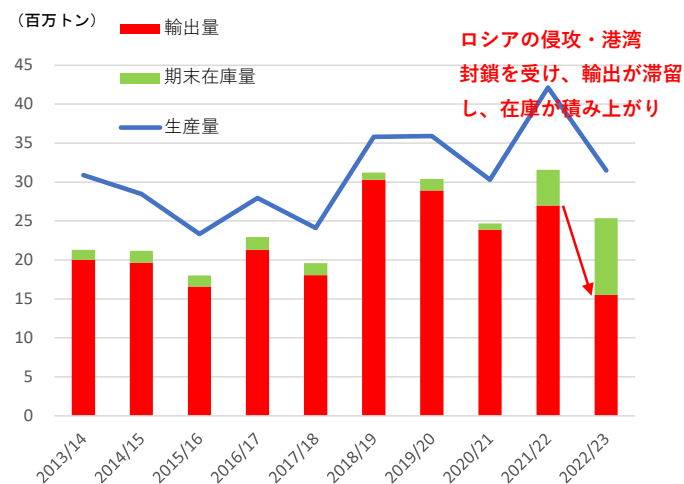
とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	30.3	42.1	31.5 (29.9)	-	▲ 25.2
消 費 量	7.1	11.4	10.7 (10.9)	-	▲ 6.1
うち飼料用	5.9	10.2	9.5 (5.5)	-	▲ 6.9
輸 出 量	23.9	27.0	15.5 (17.0)	-	▲ 42.6
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0
期末在庫量	0.8	4.6	9.9 (8.9)	-	116.0
期末在庫率	2.7%	11.9%	37.7% (31.9%)	-	25.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.50 (4.59)	-	▲ 18.0
単収(t/ha)	5.62	7.68	7.00 (6.52)	-	▲ 8.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC「Grain Market Report」(20 October 2022)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.11.9)をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量

前年度比



前月比



- ・パキスタン、ナイジェリア、ベトナム等で下方修正され、前月から下方修正された。

消費量

前年度比



前月比



- ・インドネシア等で上方修正されたものの、パキスタン、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量

前年度比



前月比



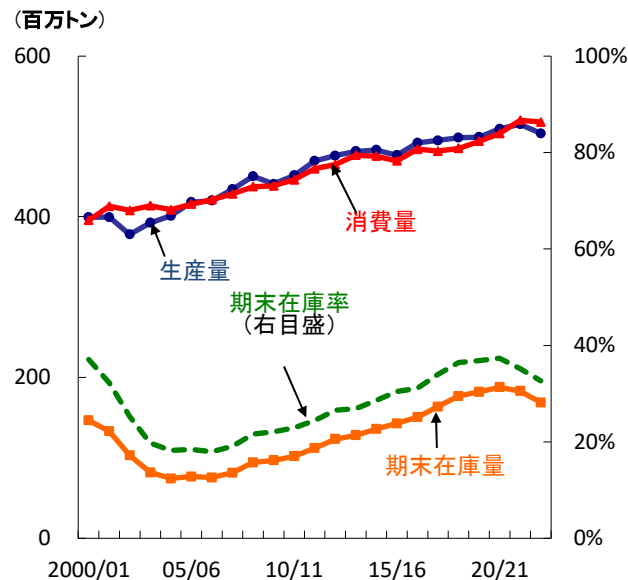
- ・インド等で上方修正されたものの、パキスタン、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量

前年度比



前月比



資料：USDA「PS&D」（2022. 11. 9）をもとに農林水産省にて作成

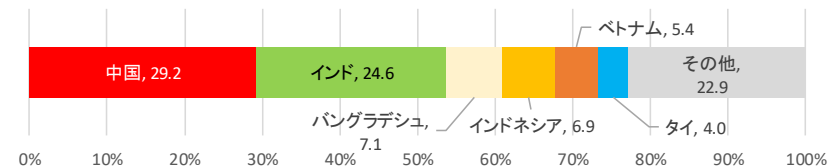
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

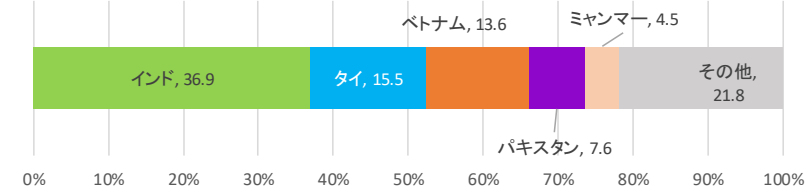
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	515.1	503.7	▲ 1.4	▲ 2.2
消 費 量	503.5	519.9	517.8	▲ 0.3	▲ 0.4
輸 出 量	50.9	56.0	52.8	▲ 0.4	▲ 5.6
輸 入 量	46.4	54.6	51.4	▲ 0.0	▲ 5.8
期末在庫量	187.9	183.1	169.0	▲ 2.2	▲ 7.7
期末在庫率	37.3%	35.2%	32.6%	▲ 0.4	▲ 2.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（9 November 2022）

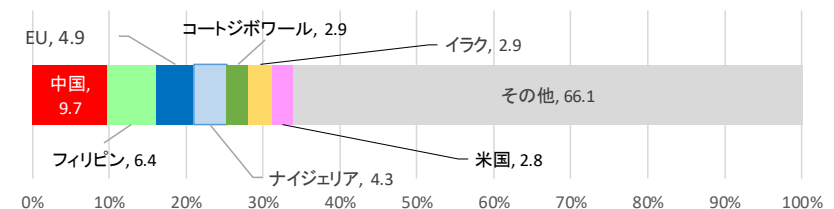
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(503.7百万トン)（単位：％）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(52.8百万トン)（単位：％）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(51.4百万トン)（単位：％）



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 生産量減少により長粒種の価格が更に上昇

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の実生産量は、単収の下方修正により、前月予測からわずかに下方修正され、対前年度比 14.3%減の 5.2 百万トンと、1993/94年度以来の低水準の見込み。収穫面積は、対前年度比で 12.9%減少し、1983/84年度以来の低水準。このうちミシシッピ川下流域（長粒種の主産地）では、農業資材の高騰、大豆やとうもろこしの収益性の方が高いこと、作付け期の降雨過多による作付け減少により、主産地のアーカンソー州等で収穫面積が減少する見通し。また中・短粒種の国内生産の 75%を占めるカリフォルニア州では、厳しい干ばつの長期化による灌漑用水不足や取水制限により、2年連続で収穫面積が減少し、1958/59年度以来の低水準となる見込み。なお、収穫は 10 月末でほぼ終了したとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、前月予測からわずかに上方修正されたものの、生産量の減少から対前年度比 6.2%減の 4.5 百万トンの見込み。

2022/23年度の実輸入量は、前月予測からわずかに上方修正され、対前年度比 19.2%増の 1.4 百万トンと史上最高の見込み。タイの香り米が輸入の大半を占めているが、9 月には、主に加工用の碎米もブラジルから輸入された。

2022/23年度の実輸出量は、輸出価格高騰による輸出競争力の低下見込みから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、対前年度比 13.8%減の 2.3 百万トンと、1991/92年度以来の低水準の見込み。

同「Rice Outlook」(2022.11.14)によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間上昇しており、11 月 8 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、碎米 4 %混入）は 730 ドル/トンと、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値となった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。また、中粒種の価格は、地中海向けカリフォルニア米（1 等、碎米 4 %混入）で 1,625 ドル / トンと、引き続き過去最高となった。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

(単位: 百万精米トン)

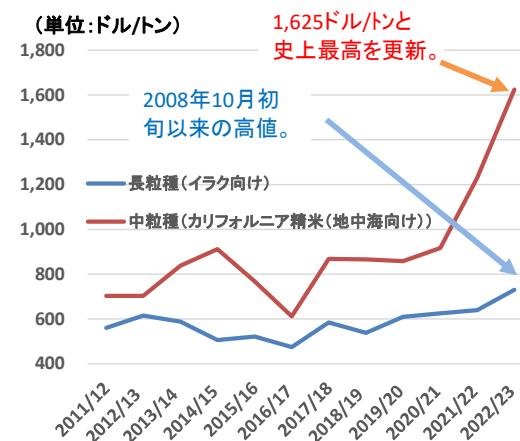
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年 8 月～23年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.2	▲ 0.0	▲ 14.3
消費量	4.9	4.8	4.5	0.0	▲ 6.2
輸出量	3.0	2.6	2.3	▲ 0.1	▲ 13.8
輸入量	1.1	1.2	1.4	0.0	19.2
期末在庫量	1.4	1.3	1.2	0.1	▲ 8.7
期末在庫率	17.8%	17.0%	17.0%	1.7	0.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.46	▲ 0.06	▲ 2.1

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)

図: 米国の長粒種と中粒種の輸出価格の推移



資料: USDA「Rice Outlook」(2022.11.14)より。価格は年度内の平均価格。

なお、2022/23年度は2022年11月の価格。

< インド > モンスーン終了の遅れによりカリフ米の収穫に遅れ

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、モンスーン期の降雨不足による作付け減少により、対前年度比 4.8%減の 124.0 百万トンの見込み。例年より南西モンスーンの終了が1週間から10日ほど遅れたため、インドのほぼ全土で10月に季節外れの降雨があり、主産地のウッタル・プラデーシュ州等北東部ではカリフ米の収穫が10月末にずれ込んだとのこと。

インド農業農民福祉省（2022.11.18）によると、ラビ米の作付け済面積は、11月17日時点で80.3万ヘクタールと、前年度同期（72.1万ヘクタール）に比べて8.2万ヘクタール増となっている。過去5年平均（2016/17 - 2020/21年度）の作付面積に対する進捗率は17.6%。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測から0.3百万トン下方修正され、生産量の減少により、対前年度比 2.1%減の 109.0 百万トンの見込み。

2021/22年度の消費量は、政府の低所得世帯向け食料配給プログラム等によるコメの追加供給で、前月予測から0.5百万トン上方修正され、対2020/21年度比 10.0%増の 111.3 百万トンと、史上最高となった。

2022/23年度の期末在庫量は、食料配給プログラム向けにコメを放出したこと等から、前月予測から1.3百万トン下方修正され、対前年度比 13.2%減の 29.5 百万トンの見込み。なお、国内価格は9月の輸出規制により緩和され、収穫の遅れにもかかわらず10月も落ち着いている。

2022/23年度の輸出量は、競合相手であるパキスタンの輸出の下方修正に伴い、前月予測から0.5百万トン上方修正されたものの、対前年度比 11.4%減の 19.5 百万トンの見込み。

なお、インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰防止のため、9月9日に輸出規制（砕米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））を発動した。ただし、依然として世界の輸出量の37%を占め、世界第1位の輸出国となる見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」（2022.11.9）によれば、インド産米（砕米5%混入）の11月8日までの価格は、385ドル/トンと前月から下落し、依然としてアジア主要輸出国の中で最も低い価格水準となっている（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメーインド

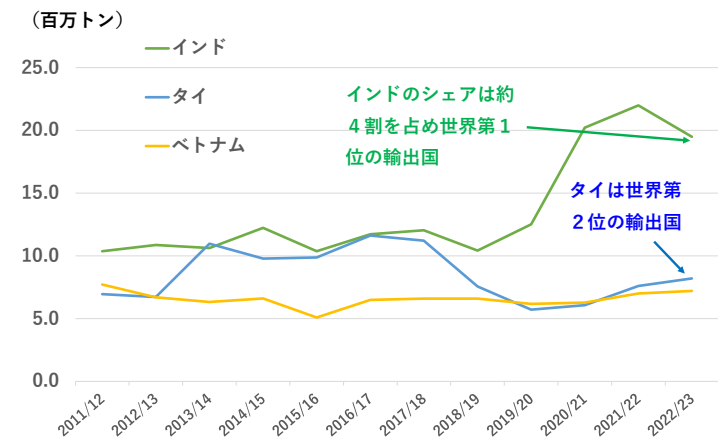
雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)	
生産量	124.4	130.3	124.0 (124.3)	-	▲ 4.8	
消費量	101.1	111.3	109.0 (109.3)	▲ 0.3	▲ 2.1	
輸出量	20.2	22.0	19.5 (15.7)	0.5	▲ 11.4	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	37.0	34.0	29.5 (32.7)	▲ 1.3	▲ 13.2	
期末在庫率	30.5%	25.5%	23.0% (26.2%)	▲ 1.0	▲ 2.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	45.77	46.38	45.50 (44.75)	-	▲ 1.9	
単収(もみt/ha)	4.08	4.21	4.09 (2.78)	-	▲ 2.9	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC 「Grain Market Report」(20 October 2022) (単収は精米t/ha)

図: 世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料: USDA 「PS&D」(2022.11.9)をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 一期作の収穫は終了、二期作も収穫期を迎えている

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比1.3%減の147.0百万トンの見込み。

国家糧油情報センター（2022.11.4）によれば、10月30日現在、黒竜江省と吉林省は稲の収穫が基本的に終了し、遼寧省は8割程度の稲が収穫された。江蘇省、安徽省などはジャポニカ米の大部分が収穫され市場に出荷されている。南部の主要産地では一期作インディカ米の収穫が終了し、大量に市場に出回っている。二期作晩稲も続々と収穫期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用米の消費量の減少から、対前年度比0.9%減の155.0百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、碎米の主要輸入先国であるパキスタンの洪水による生産減少見通し及びインドのコメ輸出規制により、対前年度比16.0%減の5.0百万トンの見込み。中国は、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入していた。

中国海関統計によれば、2022年1～9月の輸入量は、対前年同期の3.6百万トンから41.4%増加し、5.0百万トンとなった。輸入先はインドが2.0百万トンと最も多く、次いでパキスタンが1.1百万トンとなっている。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比4.6%減の107.8百万トンの見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が依然として約6割を占める見通し。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ（粳）米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年7月～23年6月）		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	148.3	149.0	147.0 (146.3)	-	▲ 1.3
消 費 量	150.3	156.4	155.0 (151.4)	-	▲ 0.9
輸 出 量	2.2	2.1	2.2 (2.2)	-	5.8
輸 入 量	4.2	6.0	5.0 (3.0)	-	▲ 16.0
期末在庫量	116.5	113.0	107.8 (103.6)	-	▲ 4.6
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.6% (67.5%)	-	▲ 2.7

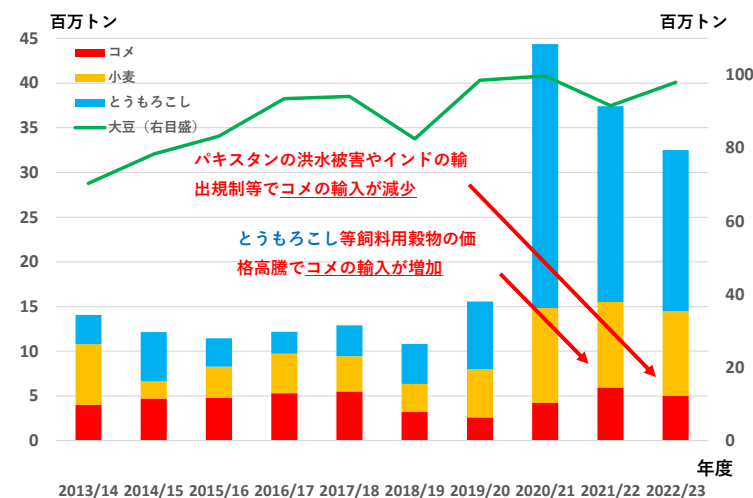
（参考）

収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00 (30.03)	-	0.3
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.00 (4.87)	-	▲ 1.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)

IGC「Grain Market Report」(20 October 2022)（単収は精米t/ha）

図：中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.11.9)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 2022/23 年度の生産量・輸出量は増加見通し

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、対 2020/21 年度比 5.3%増の 19.9 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量も、前月予測からの変更はなく、同様の気象条件を前提とすれば、雨季作及び乾季作の作付けが増え、収穫面積が拡大すると予測されることから、対前年度比 1.1%増の 20.1 百万トンの見込み。なお、10 月末から乾季米の作付けが開始されているとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、豊作とインドの輸出規制による輸出量減少の見込みから、対前年度比 7.9%増の 8.2 百万トンの見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加により、対 2020/21 年度比 24.6%増の 7.6 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2022 年 1～9 月の輸出量は、対前年同期の 3.9 百万トンから約 39%増加し、5.4 百万トンとなった。輸出先はイラクが 1.1 百万トン（対前年度比 6.5 倍）、南アフリカが 0.6 百万トン（対前年度比微増）、米国が 0.5 百万トン（対前年度比 1.3 倍）、中国が 0.5 百万トン（対前年度比 1.3 倍）。

USDA「Rice Outlook」(2022.11.14)によれば、11 月 8 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、パーツ安と新穀の入荷による供給増大により、10 月 11 日までの週の価格から 12 ドル下落し、418 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

写真：タイ中部バンレン市の圃場（11 月 3 日撮影）
2022/23 年度の乾季作の播種を控えて圃場を耕起。



コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)	
生 産 量	18.9	19.9	20.1 (20.1)	-	1.1	
消 費 量	12.7	12.8	12.9 (12.3)	-	0.8	
輸 出 量	6.1	7.6	8.2 (8.3)	-	7.9	
輸 入 量	0.2	0.1	0.2 (0.3)	▲ 0.1	15.4	
期末在庫量	4.3	3.9	3.0 (6.4)	▲ 0.1	▲ 21.9	
期末在庫率	22.8%	19.0%	14.4% (31.0%)	▲ 0.6	▲ 4.7	

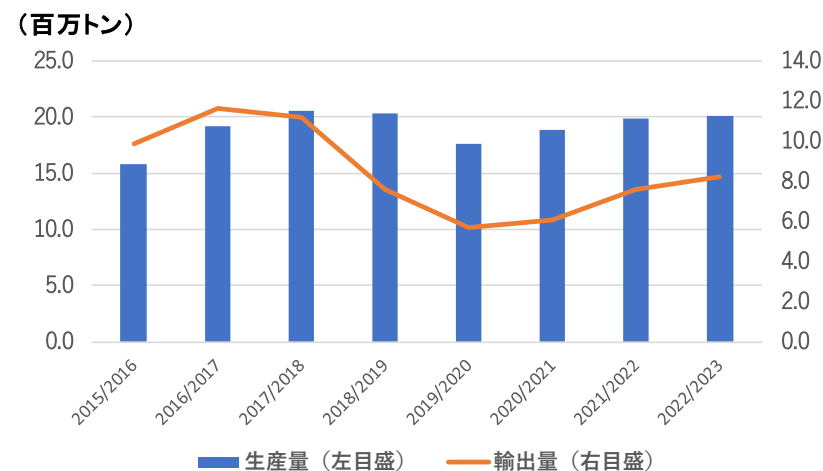
(参考)

収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85 (10.70)	-	1.4
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.81 (1.88)	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)

IGC「Grain Market Report」(20 October 2022) (単収は精米t/ha)

図：タイの生産量・輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.11.9)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > インドの輸出規制による代替需要増で輸出価格が更に上昇

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、収穫面積が前月予測から0.01ヘクタール引き下げられたことにより、前月予測から0.2百万トン下方修正されたものの、対前年度比1.1%増の27.2百万トンの見込み。

なお、2021/22年度の実産量は、前月予測から0.2百万トン下方修正され、収穫面積が5年連続で減少し、2006/07年度以来の低水準となったことから、対2020/21年度比1.8%減の26.9百万トンの見込み。なお、高収益作物（果物・野菜・養殖）への転作等により冬春作の収穫面積が減少したことや、メコン川の水量低下に伴う海水逆流による塩害の発生は、長期的な面積減少の主要因となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比2.9%増の7.2百万トンの見込み。

2021/22年度の実輸出量は、10月の輸出が予想以上だったことや、生産予測の下方修正にもかかわらず十分な輸出余力があることから、前月予測から0.1百万トン上方修正され、対2020/21年度比11.1%増の7.0百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022年1～9月の輸出量は5.4百万トンで、上位からフィリピン（2.5百万トン）、中国（0.6百万トン）、コートジボワール（0.5百万トン）となっている。うち、ジャポニカ米は0.2百万トン。

USDAによれば、2022/23年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、ベトナム国内で飼料向け等に利用されていたインドの碎米の輸出禁止措置により、対前年度比50.0%減の0.7百万トンの見込み。

2021/22年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、対2020/21年度比11.1%減の1.4百万トンの見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2022.11.9）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の11月8日までの週の価格は、タイトな供給量と需要増加により、10月11日までの週の価格から19ドル/トン上昇して448ドル/トンとなった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	27.4	26.9	27.2 (28.3)	▲ 0.2	1.1
消費量	21.5	21.5	21.5 (22.3)	-	-
輸出量	6.3	7.0	7.2 (6.8)	-	2.9
輸入量	1.8	1.4	0.7 (0.6)	-	▲ 50.0
期末在庫量	2.6	2.5	1.7 (2.7)	▲ 0.4	▲ 31.0
期末在庫率	9.5%	8.7%	6.0% (9.3%)	▲ 1.4	▲ 2.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.27	7.28 (7.22)	▲ 0.01	0.1
単収(もみt/ha)	6.00	5.93	5.99 (3.92)	▲ 0.02	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（9 November 2022）
IGC「Grain Market Report」（20 October 2022）（単収は精米t/ha）

図：長粒種のFOB価格の推移



資料：USDA「Grain: World Markets and Trade」（2022.11.9）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・米国等で上方修正も、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

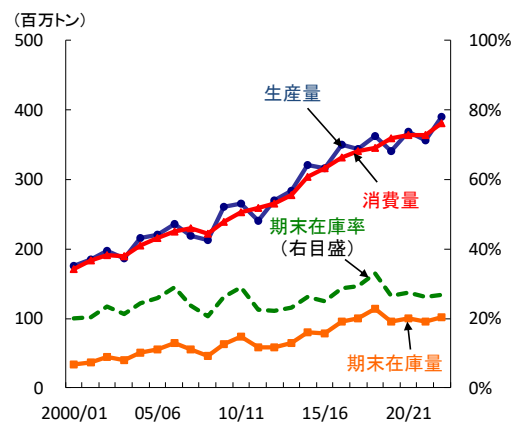
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・米国、ブラジル等で上方修正も、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出货量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・アルゼンチン、南アフリカで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2022. 11. 9）をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

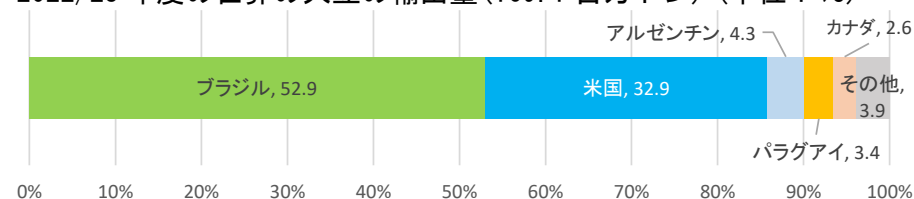
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率 (%)
生産量	368.5	355.6	390.5	▲ 0.5	9.8
消費量	363.8	363.2	380.2	▲ 0.1	4.7
うち搾油用	315.4	314.5	329.3	▲ 0.2	4.7
輸 出 量	165.0	154.0	169.1	0.3	9.8
輸 入 量	165.5	156.2	166.3	0.1	6.4
期末在庫量	100.0	94.7	102.2	1.7	7.9
期末在庫率	27.5%	26.1%	26.9%	0.4	0.8

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(9 November 2022)

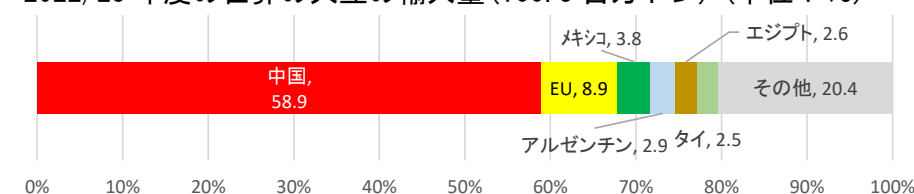
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (390.5 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出货量 (169.1 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (166.3 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 生産量は減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、11月1日時点での作柄を踏まえ、アイオワ州、ミズーリ州、ネブラスカ州等の単収が上方修正されたことで、前月予測から0.9百万トン上方修正されたものの、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から前年度より2.7%減の118.3百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」(2022.11.14)によれば、収穫期の天候に恵まれ、主要18州における収穫進捗率は96%と前年度同期及び過去5年平均(ともに91%)より進んでいる。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、国内の大豆粕需要の高まりにより搾油用消費量が上方修正されたことから前月予測から0.3百万トン上方修正され、前年度より2.7%増の64.5百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より5.2%減の55.7百万トンの見込み。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～11月3日)は、38.9百万トンであり、内訳は中国(19.1百万トン)、メキシコ(4.5百万トン)、エジプト(2.7百万トン)、日本(2.0百万トン)、ドイツ(2.0百万トン)の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から0.6百万トン上方修正されたものの、生産量減少と消費量増加から前年度より19.6%減の6.0百万トンの見込み。なお、期末在庫率は5.0%で、前年度を下回り、2015/16年度以来の低水準の見込み。

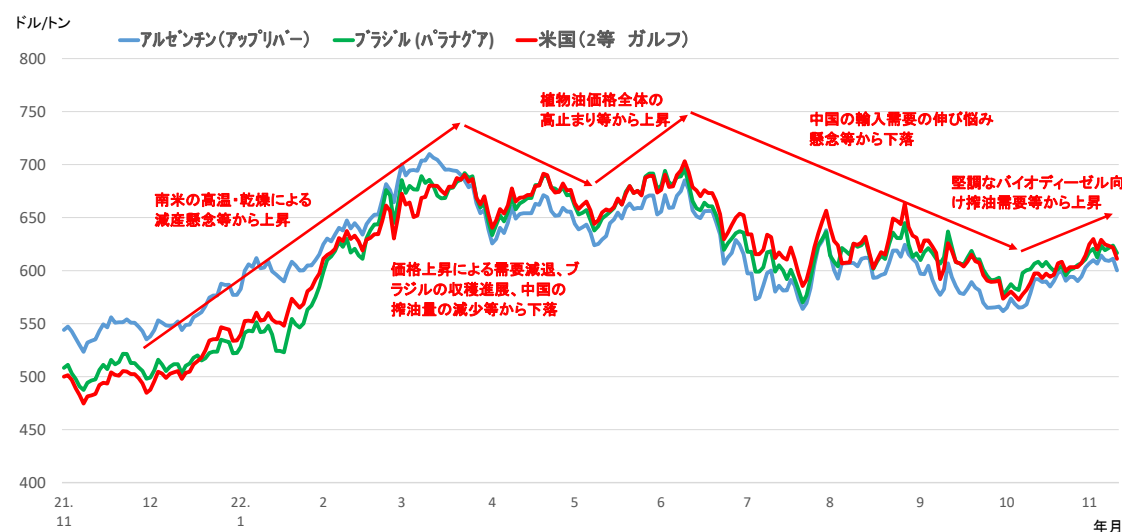
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	114.8	121.5	118.3	0.9	▲ 2.7
消 費 量	60.9	62.8	64.5	0.3	2.7
うち搾油用	58.3	60.0	61.1	0.3	1.9
輸 出 量	61.7	58.7	55.7	－	▲ 5.2
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	－	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	6.0	0.6	▲ 19.6
期末在庫率	5.7%	6.1%	5.0%	0.4	▲ 1.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.93	35.06	－	0.4
単収(t/ha)	3.43	3.48	3.37	0.02	▲ 3.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格(FOB)の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出量も史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、前年度より19.7%増の152.0百万トンと史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマット・グロッソ州（最大生産州）、ゴイアス州等で増加見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告（2022.11.9）によれば、2022/23年度の実産量は、ラニーニャ現象から南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より22.3%増の153.5百万トンで史上最高の見込み。

11月上旬から中旬にかけて、多くの産地で平年以下の降水量となっている。作付進捗率は、中西部のマット・グロッソ州で11月18日現在、99%で過去5年平均（97%）より進み、南部のパラナ州で11月7日現在、79%と前年度同期（88%）より遅れている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で11月17日現在、30%と過去5年平均（46%）より遅れている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、搾油用消費量の上方修正により、前月予測から0.3百万トン上方修正され、前年度より2.0%増の55.4百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加から前年度より12.8%増の89.5百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～10月の輸出量は74.6百万トンで、前年同期（80.8百万トン）に比べ7.7%減となっている。内訳は、1位が中国50.5百万トン、2位がスペイン3.2百万トン、3位がタイ2.5百万トンとなっている。なお、10月の輸出量は4.1百万トンで前年同月（3.3百万トン）と比べ、23.4%増となっている。

大豆－ブラジル

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	139.5	127.0	152.0 (147.5)	-	19.7
消 費 量	49.9	54.3	55.4 (53.8)	0.3	2.0
うち搾油用	46.7	51.0	51.8 (50.8)	0.3	1.5
輸 出 量	81.7	79.4	89.5 (91.0)	-	12.8
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.4)	-	38.9
期末在庫率	29.4	23.3	31.2 (4.9)	▲ 0.1	33.8
期末在庫率	22.4%	17.5%	21.6% (3.4%)	▲ 0.1	4.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.50	42.90 (42.89)	-	3.4
単収(t/ha)	3.53	3.06	3.54 (3.44)	-	15.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC「Grain Market Report」(20 October 2022)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培予定。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート（2022.11.9）

< アルゼンチン > 生産量は史上最高、輸出量前年度比 2.5 倍（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、収穫面積予想の下方修正に伴い、前月予測から 1.5 百万トン下方修正され、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より 12.8%増の 49.5 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.11.17）によれば、2022/23 年度の作付進捗率は 12%で、最近の降雨で表層の土壌水分量は改善したものの、前年度同期（28%）より 16 ポイント遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、生産量の下方修正に伴う搾油用消費量の下方修正により前月予測から 0.8 百万トン下方修正されたものの、生産量の増加に伴い、前年度より 2.1%増の 47.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、9 月末までの為替優遇措置による農家売渡しの急増に伴い、10 月の輸出も好調だったことから前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度より 2.5 倍の 7.2 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～9 月の輸出量は 244.9 万トンで、前年同期（497.8 万トン）より 50.8%減。内訳は、1 位が中国 202.2 万トン、2 位が米国 8.8 万トン、3 位がチリ 4.2 万トン。9 月の輸出量は 116.4 万トンで、為替優遇措置により前年同月（83.3 万トン）の 1.4 倍。

アルゼンチンは、丸大豆より搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第 1 位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%に設定。さらに、2022 年 3 月 19 日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスリリースによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2 %引き上げ、大豆と横並びの 33%に変更した。

また、2022 年 9 月 4 日にアルゼンチン政府は、足元の公式為替レート of 139 ペソ/ドルから 9 月末まで丸大豆輸出のみに適用される為替優遇措置（200 ペソ/ドル）を大豆農家に対して発表したことにより、これまで滞留していた農家の大豆売渡が加速した。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	46.2	43.9	49.5	(48.0)	▲ 1.5	12.8
消 費 量	47.4	46.0	47.0	(48.2)	▲ 0.8	2.1
うち搾油用	40.2	38.8	39.8	(42.2)	▲ 0.8	2.4
輸 出 量	5.2	2.9	7.2	(4.5)	0.2	151.7
輸 入 量	4.8	3.8	4.8	(4.8)	-	25.0
期末在庫量	25.1	23.9	24.0	(3.7)	▲ 0.2	0.4
期末在庫率	47.6%	48.9%	44.3%	(7.0%)	0.1	▲ 4.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	15.90	16.50	(16.65)	▲ 0.50	3.8
単収(t/ha)	2.81	2.76	3.00	(2.88)	-	8.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(9 November 2022)

IGC「Grain Market Report」(20 October 2022)

写真：北部サンタフェ州の播種を待つ大豆種子 (11 月 6 日撮影)

降雨不足により作付けが遅れており、降雨により土壌水分量が改善し次第、作付け開始。



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府の補助金による大豆生産奨励策で収穫面積が増加したことから、前年度より12.2%増の18.4百万トンの見込み。

中国中央气象台によれば、11月上旬現在、収穫はすでに終了。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、畜産向け国内大豆粕需要が前年度（経済成長の減速により豚肉を中心に食肉需要が低調）から回復することにより、前年度より8.7%増の116.6百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より7.0%増の98.0百万トンの見込み。なお、2021/22年度の輸入量は、貿易実績を反映し、前月予測から1.6百万トン上方修正されたものの、2020/21年度より8.2%減の91.6百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～9月の輸入量は69.1百万トンと、前年同期比で6.7%減。内訳は、ブラジル産46.5百万トン（67%）、米国産19.4百万トン（28%）。今後は、米国の収穫に伴い、輸入先が徐々に米国産に切り替わるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年9月号」によると、9月は、新穀大豆が市場に出荷されたものの、農家は作付けコストの上昇を受けて、新穀大豆価格に対する高値の期待が高く、売却に消極的。しかし、国家備蓄大豆の競売が数回行われたことで、国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,520元/トン）から横ばいの6,520元/トンとなり、依然として高水準で推移している。新穀大豆の市場への供給が増加することから、今後、国内価格は短期的に小幅下落するとみられる。9月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、米国の単収低下懸念や原油先物価格の上昇から5,260元/トンと前月（5,040元/トン）から上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

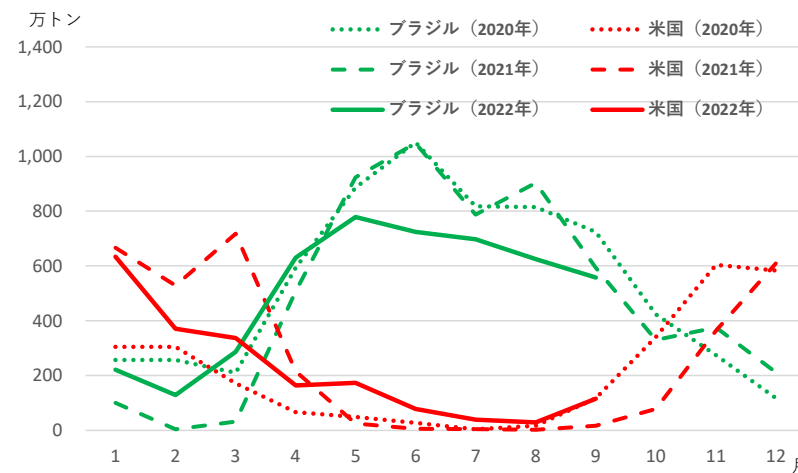
大豆—中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	19.6	16.4	18.4 (19.5)	-	12.2	
消 費 量	112.7	107.2	116.6 (114.2)	-	8.7	
うち搾油用	93.0	87.5	96.0 (95.5)	-	9.7	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-	
輸 入 量	99.7	91.6	98.0 (96.3)	-	7.0	
期末在庫量	31.2	31.8	31.5 (31.4)	1.0	▲ 0.9	
期末在庫率	27.6%	29.6%	27.0% (27.5%)	0.9	▲ 2.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	9.35 (9.90)	-	11.3	
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97 (1.97)	-	1.0	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(9 November 2022)
IGC「Grain Market Report」(20 October 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積は減少するものの、単収の増加から前年度より3.6%増の6.5百万トンの見込み。11月中旬時点で、収穫は終了。

カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2022.11.18）によれば、2022/23年度の収穫面積は前年度より1.7%減の一方、単収は西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、前年度において高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より44.3%増と増加するなど、カナダ全体の単収が5.4%増となることから、生産量は前年度より3.7%増の6.5百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.8%増の2.5百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より2.9%増の4.4百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23年度（2022年8月～2023年7月）のうち、2022年8～9月の輸出量は4.4万トンで、国別では、オランダ（2.1万トン）、ベルギー（2.1万トン）の順である。

大豆－カナダ

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年8月～23年7月）			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	6.4	6.3	6.5 (6.5)	－	3.6	
消費量	2.5	2.4	2.5 (2.5)	－	2.8	
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	－	0.3	
輸 出 量	4.7	4.3	4.4 (4.4)	－	2.9	
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	－	▲ 7.6	
期末在庫量	0.3	0.4	0.6 (0.3)	－	30.4	
期末在庫率	4.1%	6.4%	8.1% (4.3%)	－	1.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.10 (2.10)	－	▲ 1.4	
単収(t/ha)	3.12	2.94	3.10 (3.10)	－	5.4	

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(9 November 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(18 November 2022)

写真：カナダ西部の大豆の運搬風景 （10月29日撮影）鉄道貨車を牽引



(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.040469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

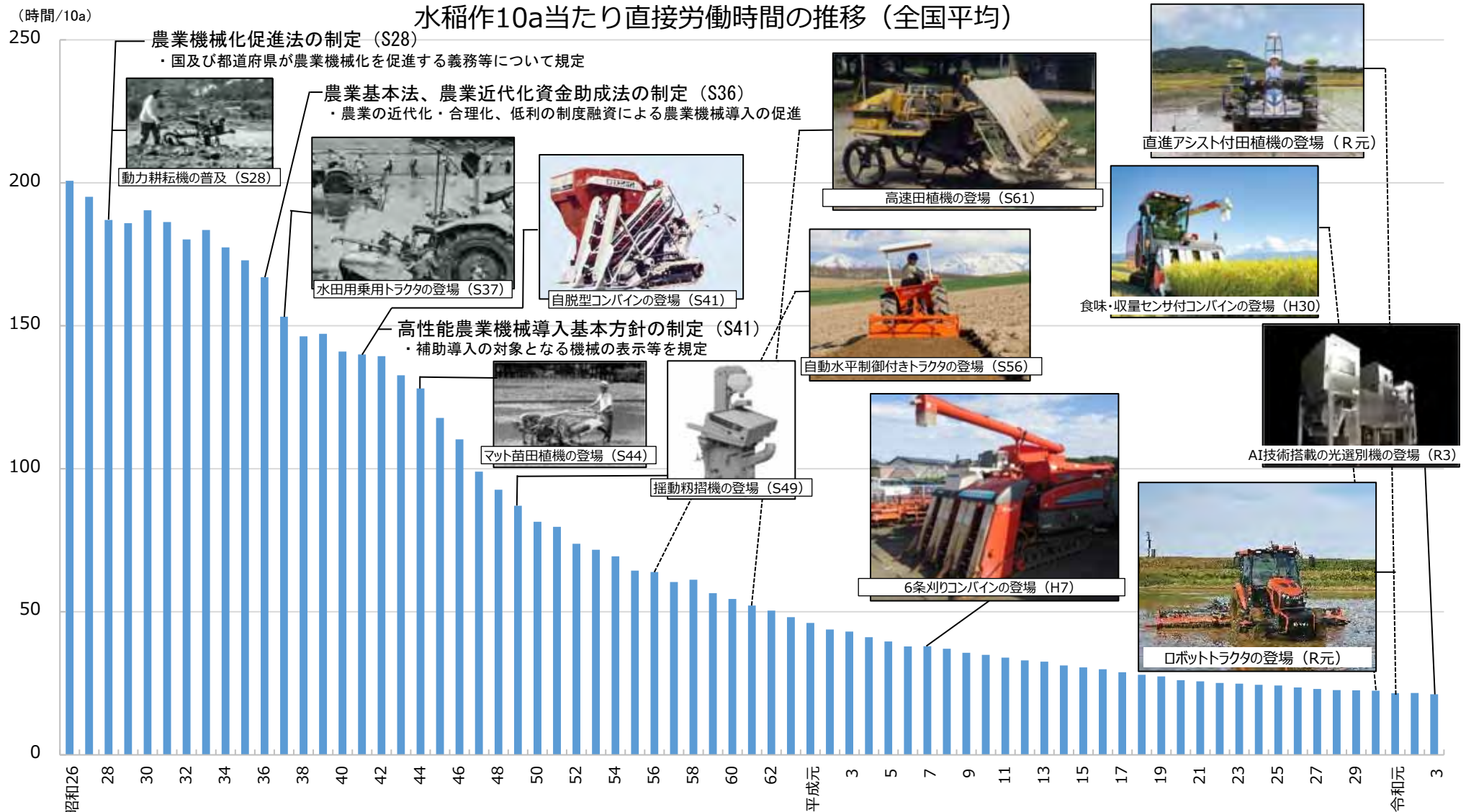
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏： $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

第17号特別分析トピック：我が国と世界の農業機械をめぐる動向

農業機械化の進展と労働時間の推移（稲作）

- 我が国の農業は、土地利用型作物を中心に効率的な機械化体系を構築。特に水田作では労働時間の大幅な削減に寄与。
- 更なる省力化に向けて、ロボット技術やICT、AIなどの先端技術を活用したスマート農業の進展は重要。



資料：農林水産省「米生産費統計」、（一社）日本農業機械化協会「50年のあゆみ」等を基に農林水産省作成

農業機械の種類

○ 農業機械は様々な種類が存在し、水田用だけでなく、野菜や果樹、畜産・酪農でも多く活用されている。

水田・畑作用	耕うん・整地・基肥		あぜ塗り・代かき		育苗・移植・播種		営農管理		収穫・調整	
										
	プラウ（作業機）	ロータリー（作業機）	あぜ塗り機（作業機）	不耕起汎用播種機	田植え機	中耕除草機	自脱コンバイン	穀物乾燥機		
野菜用 露地・施設	耕うん・整地・基肥		育苗・移植・播種		営農管理		収穫		調整	
										
	ロータリー（作業機）	畝成型機	自動移植機	播種機	中耕培土機	ブームスプレーヤ	キャベツ収穫機	ネギ収穫機	野菜調整装置	
果樹用	整枝・剪定		営農管理（施肥、除草・防除）			収穫		調整・選別		
										
	果樹園用剪定機	高所作業台車	背負式散布機	スピードスプレーヤ	高所作業台車	収穫ロボット	共同選果施設			
畜産・酪農用	飼料作		飼養管理			糞尿処理				
										
	マニユアスプレッタ	ロールバレーラ	フォレージハーベスタ	自動給餌装置	搾乳ロボット	コンポスト	メタン発酵施設			

(参考) トラクタの機能について

○ トラクタは、土を耕すロータリをはじめとするインプルメントと呼ばれる多種多様な作業機を接続することで、様々な作業に対応できる汎用型の機械。

あぜ塗り



代かき



施肥



ロール



マルチ



播種



トラクタには、PTO (※) と呼ばれる作業機にエンジンの動力を転送する仕組みが搭載されており、様々な機械を装着して作業を行う。

(※) パワーテイクオフの略称。トラクタのエンジンの回転を「油圧」の圧力に変えることで、作業機を動かす装置。



切り返し



運搬



耕起



畝立て



消毒



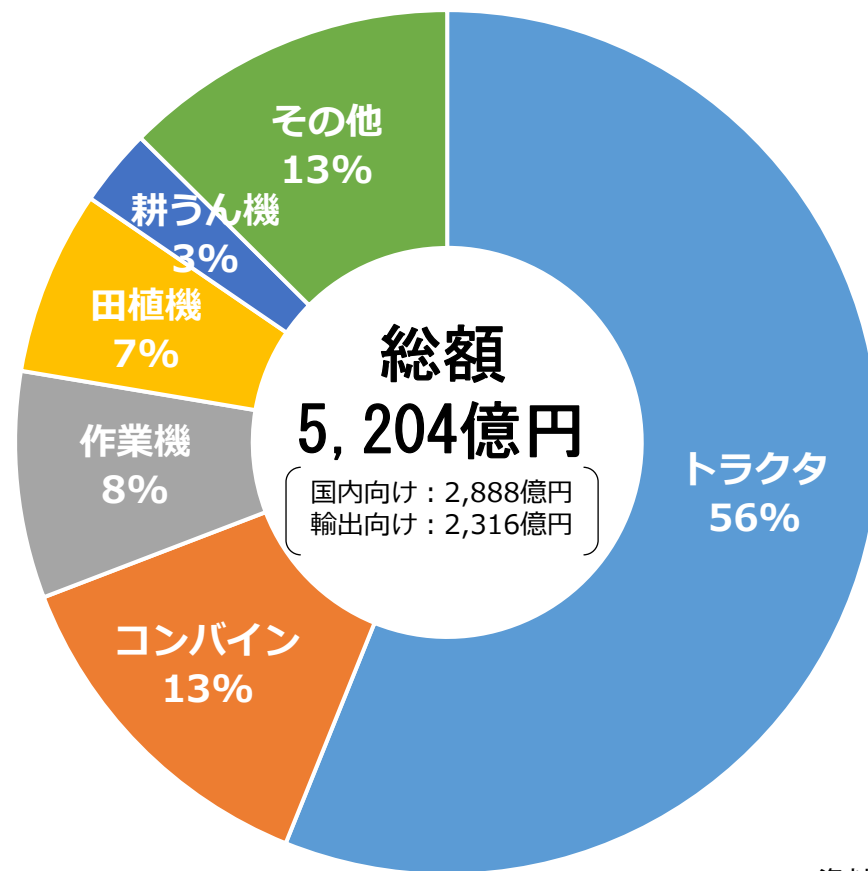
草刈り



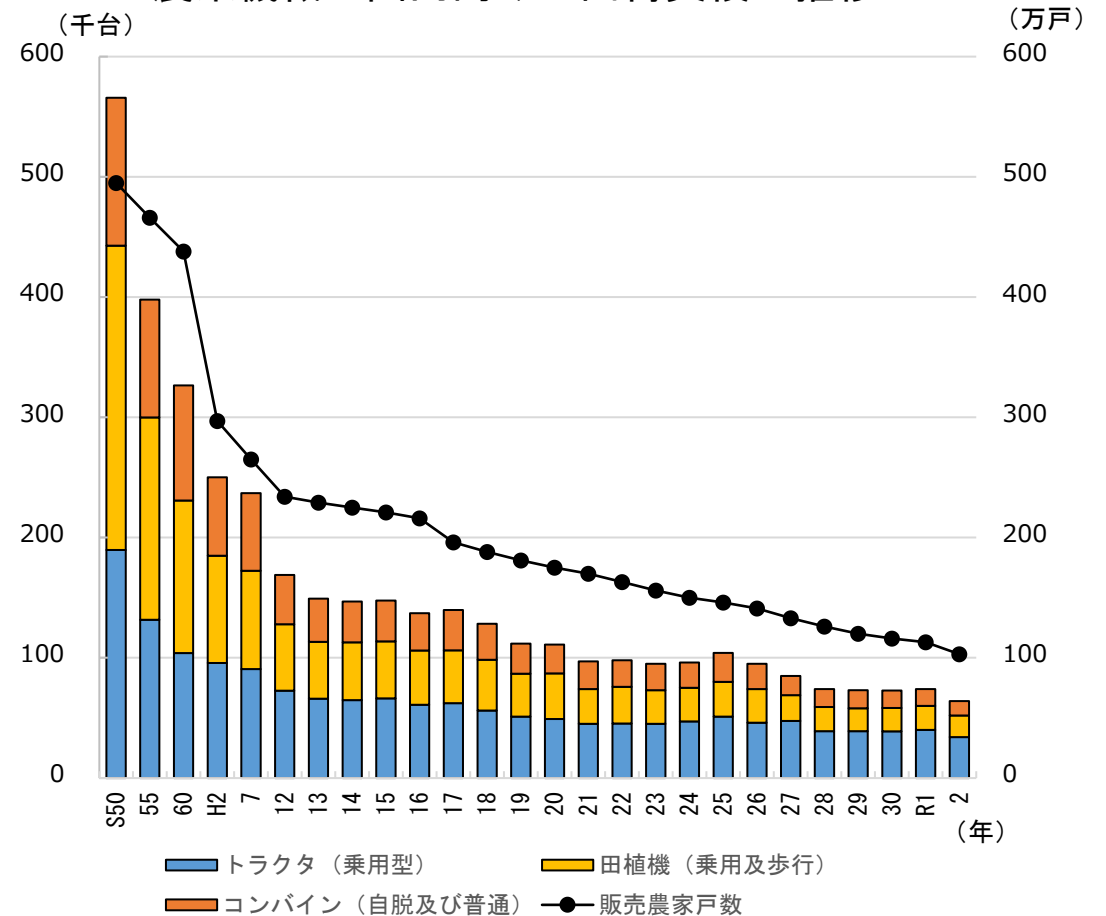
農業機械の生産・出荷状況

- 農業機械の国内での生産額は5,204億円(そのうち、国内向け2,888億円、輸出向け2,316億円)(令和3年)
- 農家数の減少と農業機械の大型化に伴い、主要農業機械(トラクタ、田植機、コンバイン)の国内向け出荷台数は年々減少。

農業機械の国内での生産実績 (令和3年)



農業機械の国内向けの出荷実績の推移



資料：農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」、
 (一社)日本農業機械化協会「主要農業機械の出荷状況」

注1：トラクタは乗用型、田植機は歩行型と乗用型の合計、コンバインは自脱型と普通型の合計。

注2：昭和60年までの販売農家数は総農家戸数である。

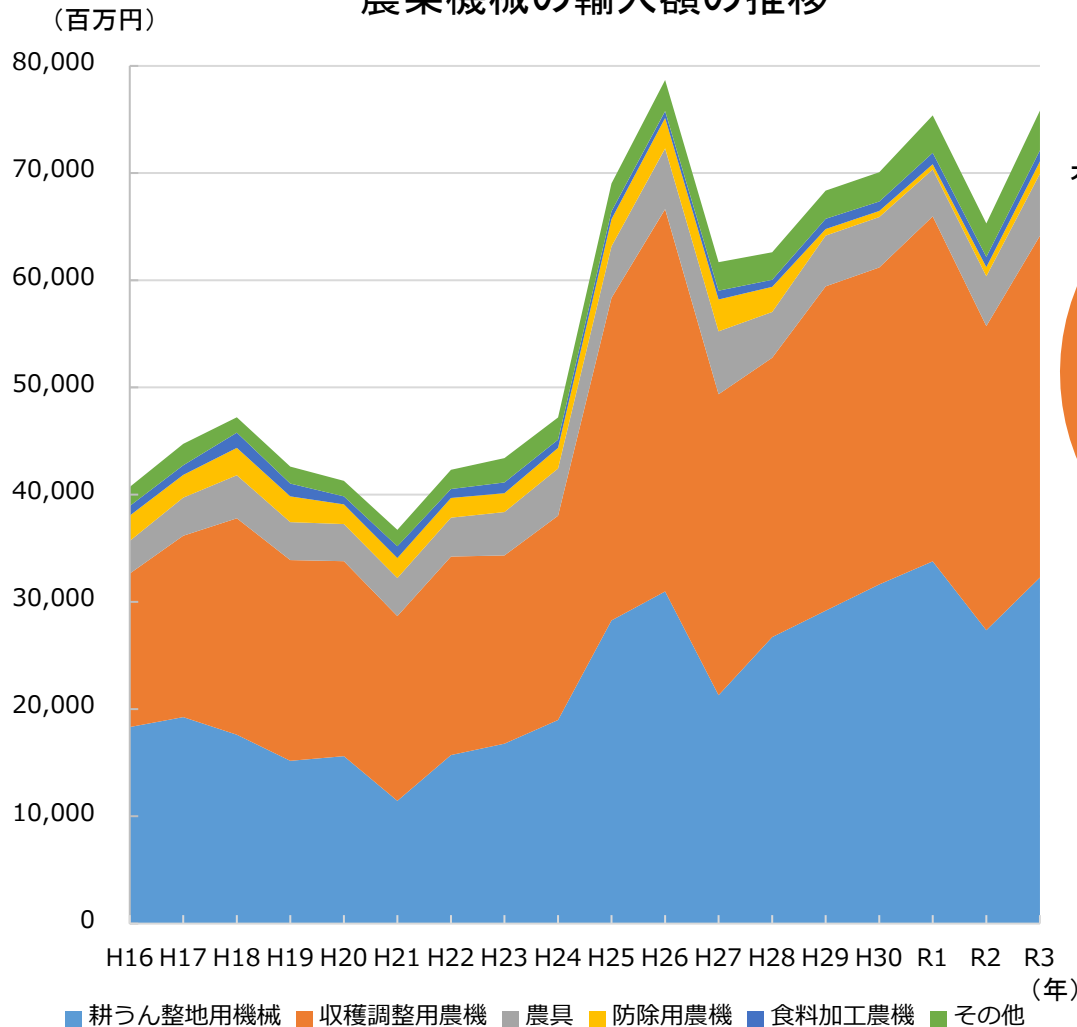
資料：(一社)日本農業機械工業会「日農工統計」

注：生産額は(一社)日本農業機械工業会の会員の実績の合計

農業機械の輸入動向

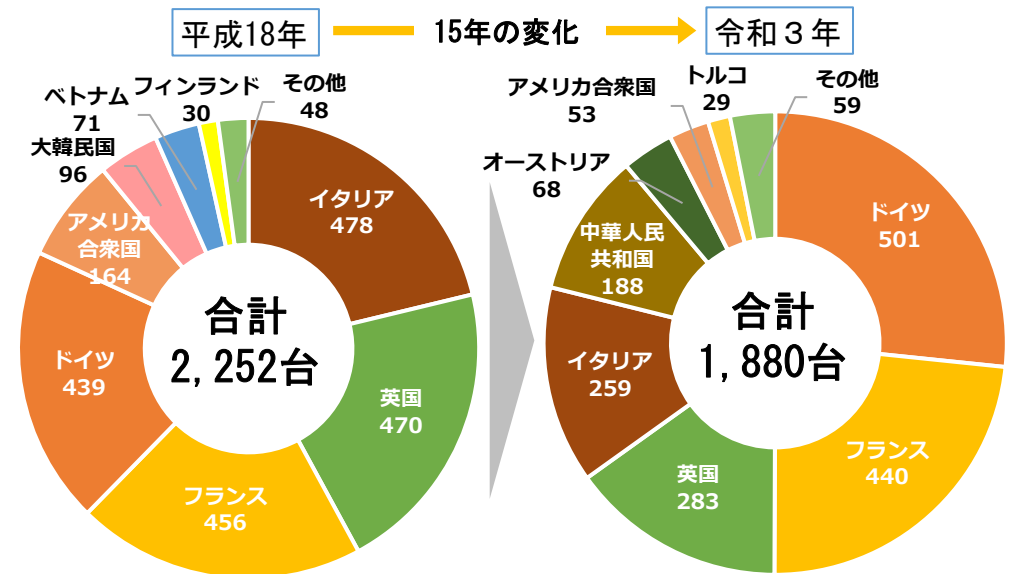
- 農業機械の輸入額は、主に大型のトラクタ(75kw以上)や草刈り機(回転式)が多い。
- 輸入額は、耕うん整地用機械、収穫調整用農機を中心に増加傾向で推移しており、トラクタの輸入先国に大きな変化はないが、1台当たりの単価は上昇傾向。

農業機械の輸入額の推移

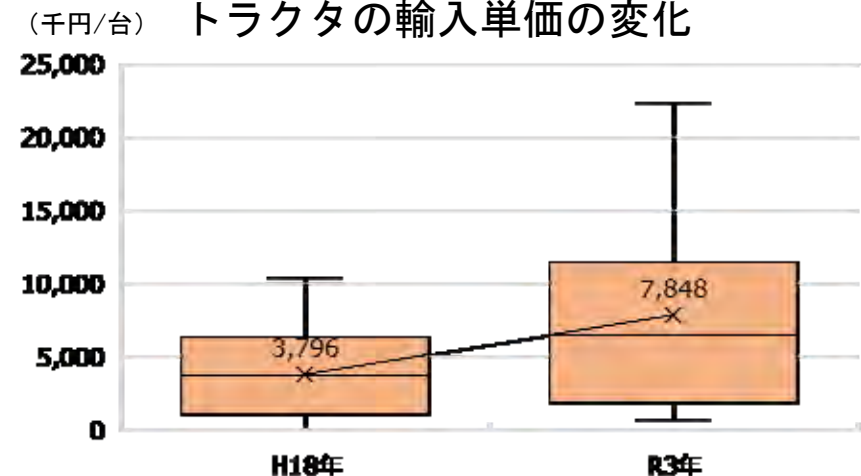


資料：(一社)日本農業機械工業会「日農工統計」、財務省「貿易統計」
 注：輸入単価は、トラクタの輸入額を台数で除して試算したもの。

トラクタの輸入先国の内訳

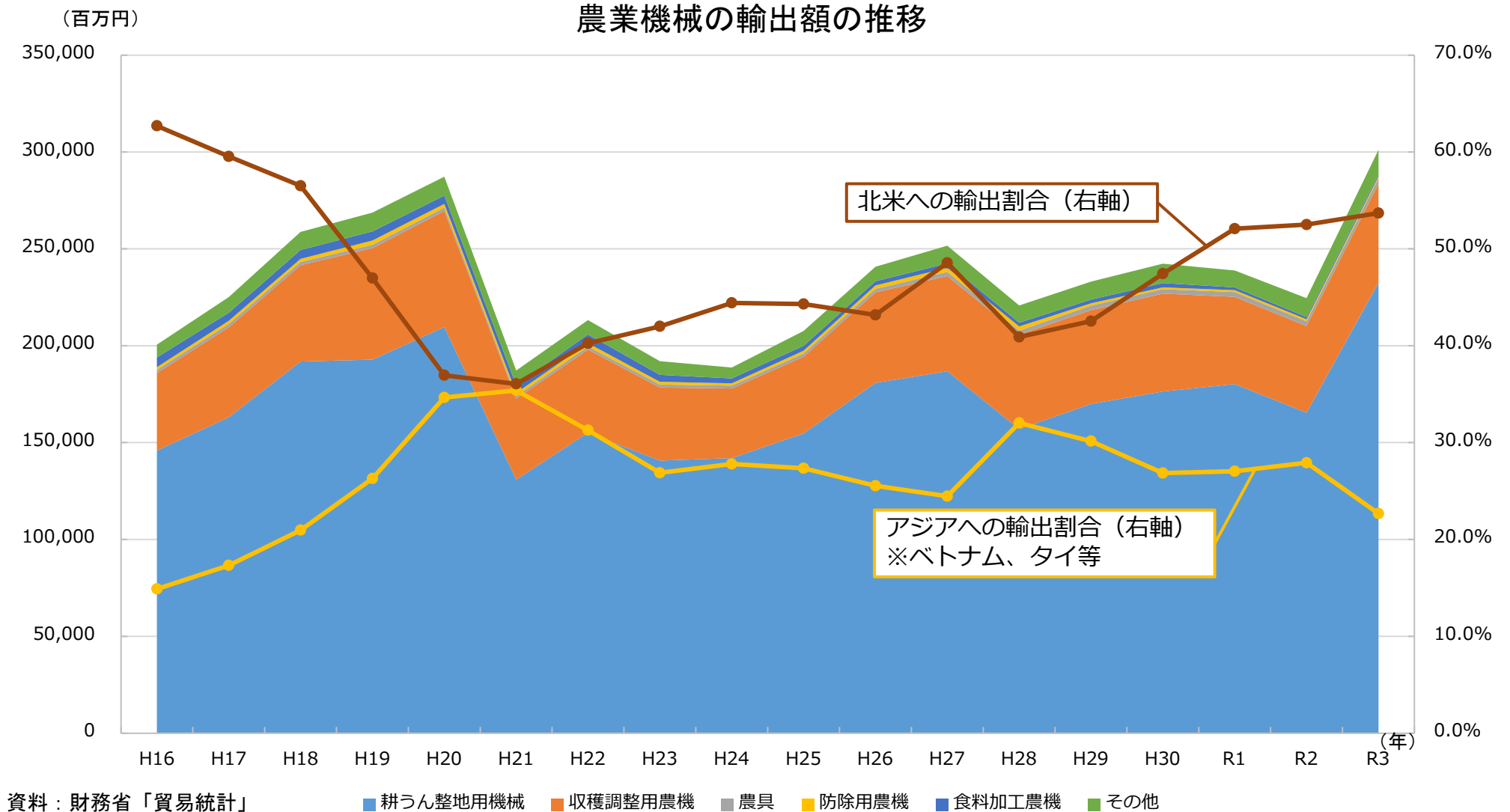


トラクタの輸入単価の変化



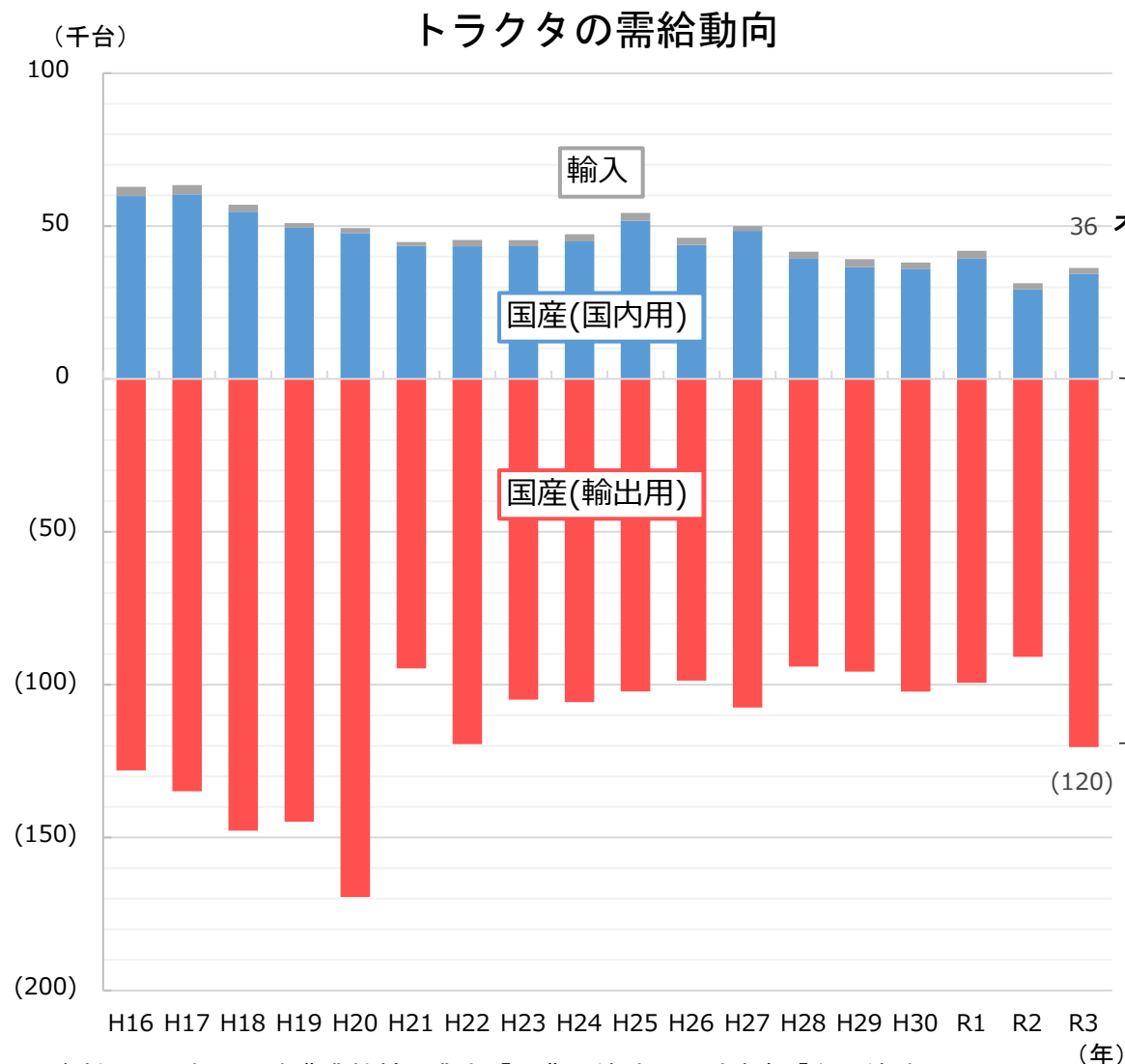
農業機械の輸出動向

- 農業機械の輸出額は、耕うん整地用機械（主にトラクタ）の北米への輸出が大宗を占めており、アジア市場への進出で一時期は比率が落ちたが、各社がアジア圏での生産体制を強化したこともあり、北米向けの輸出比率は上昇傾向となっている。

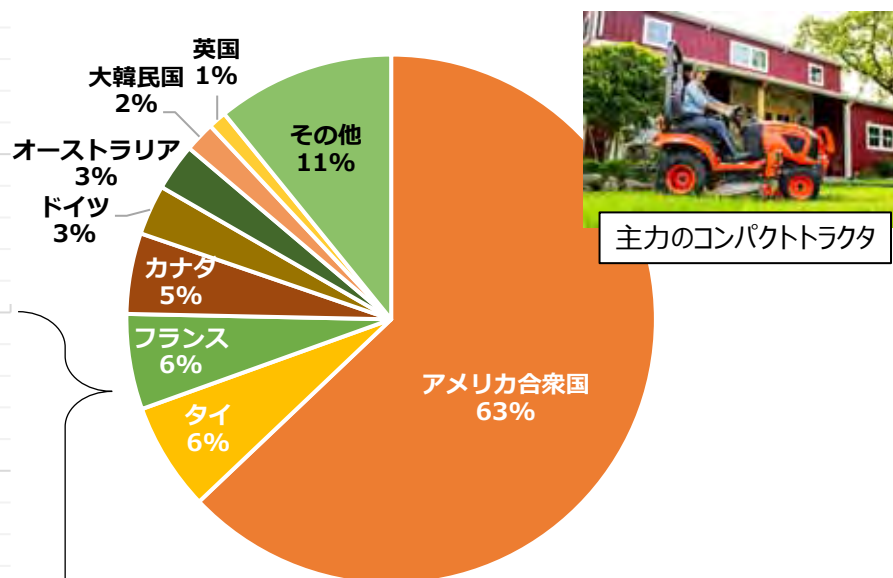


トラクタの需給（国内生産、輸出入）の推移

○ トラクタは、国内生産のうち約7～8割が輸出用。主に米国向けの輸出が多く、馬力別の内訳を見ると、37～75kw以下の規格が多く輸出されており、ガーデニングを中心に利用されている。



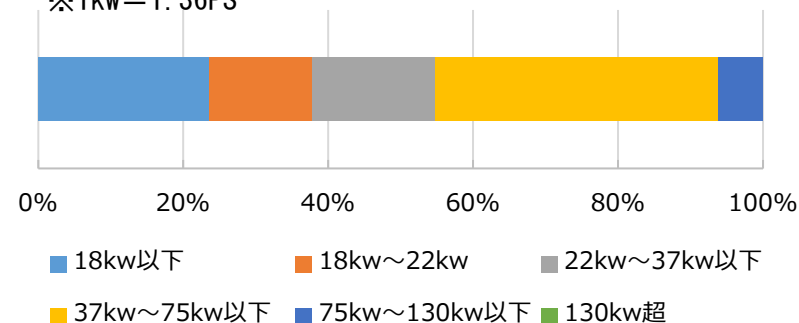
トラクタの輸出先内訳（令和3年）



主力のコンパクトトラクタ

輸出トラクタの馬力別内訳（令和3年）

※1kw=1.36PS

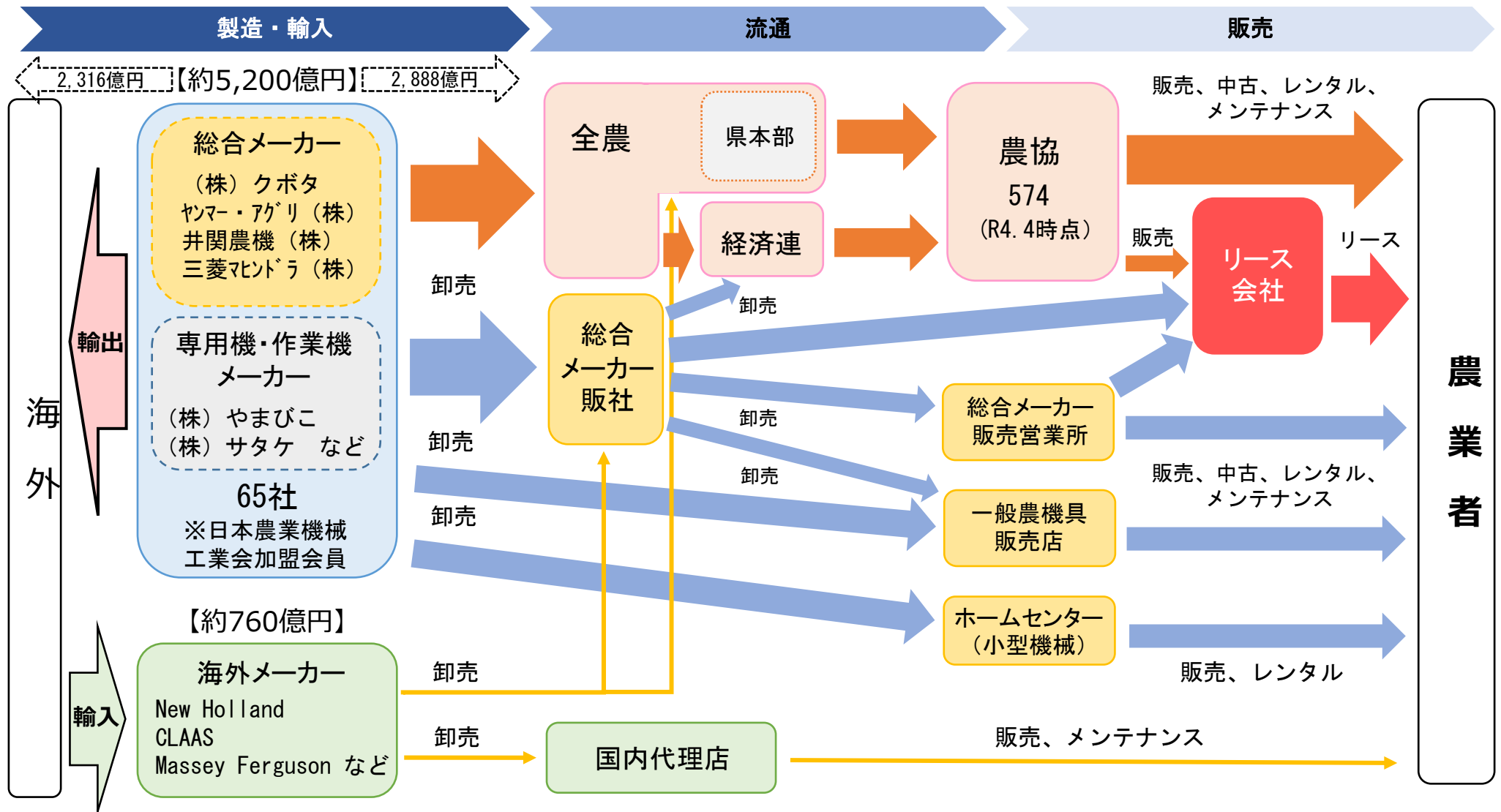


資料：（一社）日本農業機械工業会「日農工統計」、財務省「貿易統計」

注：トラクタの輸出は中古品は含まない。国産（輸出用）は出荷時の統計値であり、貿易統計の数値とは異なる。

農業機械の流通形態

- 農業機械の流通構造は、大きく分けると全農から農協までの系統ルートと農業機械メーカーの販売ルートの2通りが存在。直接販売だけでなくリース会社を通じたリース販売の形態も普及している。

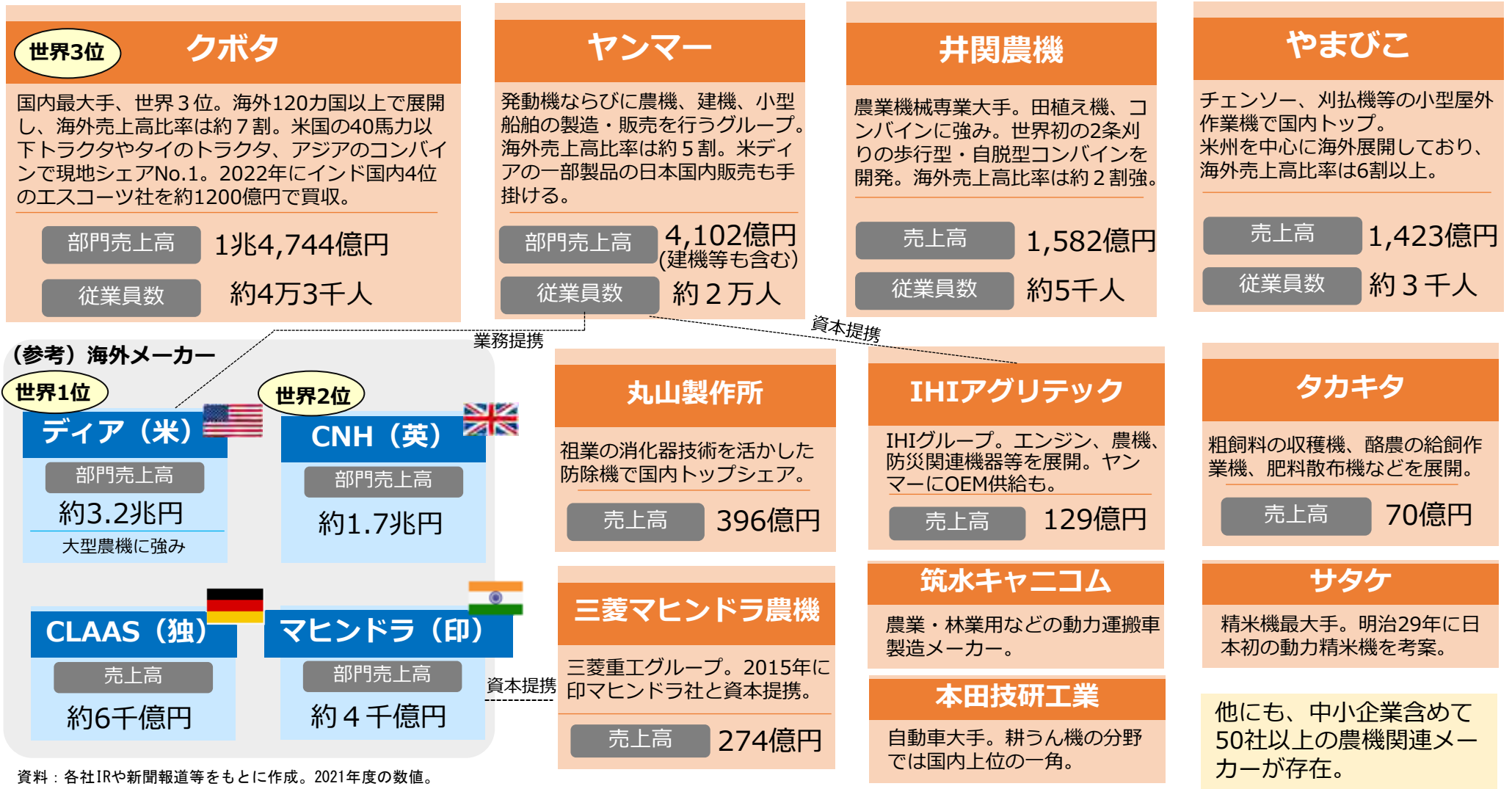


資料：（一社）日本農業機械工業会「日農工統計」、財務省「貿易統計」、農林水産省「農業協同組合等現在数統計」

注：金額については、国内は製造段階の生産額、海外は通関時のCIF価格の合計。どちらも令和3年の数値。農協数は総合農協の数。

我が国と世界の農機メーカー

- 日本には、世界有数の売上規模を有する企業や、特定の農機等に特化した企業が多数存在。
- 世界の農機大手3社(ディア(米)、CNH(英)、クボタ(日))は数兆円規模の売上高を有する。



資料：各社IRや新聞報道等をもとに作成。2021年度の数値。

注1：海外企業の売上高については直近決算期末時点の為替レートで便宜的に円換算した数値。

注2：部門売上高について、クボタは「農機・エンジン」部門、ヤンマーは「産業用機械」部門（建機等も含む数値）、Deere & Co（上記では米ディアと標記）は、Production & Precision Agriculture部門とSmall Agriculture & Turf部門の合計値、CNH Industrial NV（上記では英CNHと標記）は、Agriculture部門、Mahindra & Mahindra Ltd（上記では印マヒンドラと標記）はFarm Equipment部門とし、それ以外は便宜的に全社売上高とした。従業員数は他部門も含む全社の連結従業員数。

世界の農機市場及び農機メーカーの地域別売上高

- クボタやヤンマー等はディア等と比較してアジア向けの売上割合が大きいなど、各社が得意とする地域は様々。
- 世界の農機市場規模について、汎用性の高いトラクタが半分以上を占める。
- トラクタの地域別販売台数では、農家数の多いインドと中国で半分以上を占める。

地域別売上高

(2021年度)

資料：各社IR資料等をもとに作成。2021年度の数値。



ディア
(米)

北米
56%

欧州
22%

アジア
11%

南米
12%

約3兆2千億円



CNH
(英)

北米
35%

欧州
32%

南米
16%

その他
17%

約1兆7千億円



クボタ

北米
37%

欧州
13%

アジア
46%
(日本27%)

その他
4%

約1兆5千億円

(販売割合は全社数値)



CLAAS
(独)

欧州
73%

その他
27%

約6千億円
(全社数値)



マヒンドラ
(印)

インド国内
87%

その他
13%

約4千億円
(販売割合は全社数値)



ヤンマー

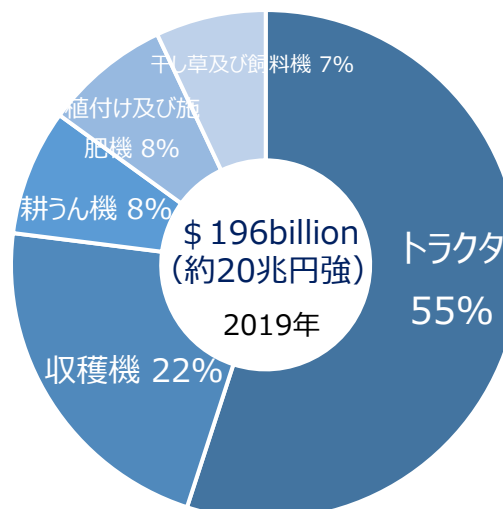
北米 18%
欧州 15%

アジア
62%
(日本44%)

その他
5%

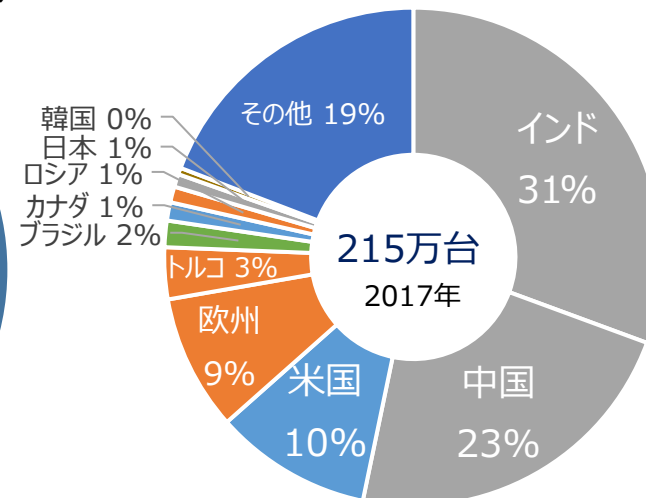
約4千億円
(建機等も含む)
(販売割合は全社数値)

種類別のマーケット規模 (世界)



出所：インド商工会議所連合会、PricewaterhouseCoopers「Farm mechanisation Ensuring a sustainable rise in farm productivity and income」(2019年)。

地域別トラクタ販売台数 (世界)



出所：Agrievolutionのプレスリリースより作成。10

注1：海外企業の売上高については直近決算期末時点の為替レートで便宜的に円換算した数値。

注2：部門売上高について、クボタは「農機・エンジン」部門、ヤンマーは「産業用機械」部門（建機等も含む数値）、Deere & Co（上記では米ディアと標記）は、Production & Precision Agriculture部門とSmall Agriculture & Turf部門の合計値、CNH Industrial NV（上記では英CNHと標記）は、Agriculture部門、Mahindra & Mahindra Ltd（上記では印マヒンドラと標記）はFarm Equipment部門とし、それ以外は便宜的に全社売上高とした。従業員数は他部門も含む全社の連結従業員数。

注3：地域別売上シェアについては、米ディアと英CNHは農機関連部門の地域別販売割合であるが、それ以外の企業については、セグメント別の地域別販売割合の開示が無いため、便宜的に全社（連結売上高）の地域別販売割合とした。

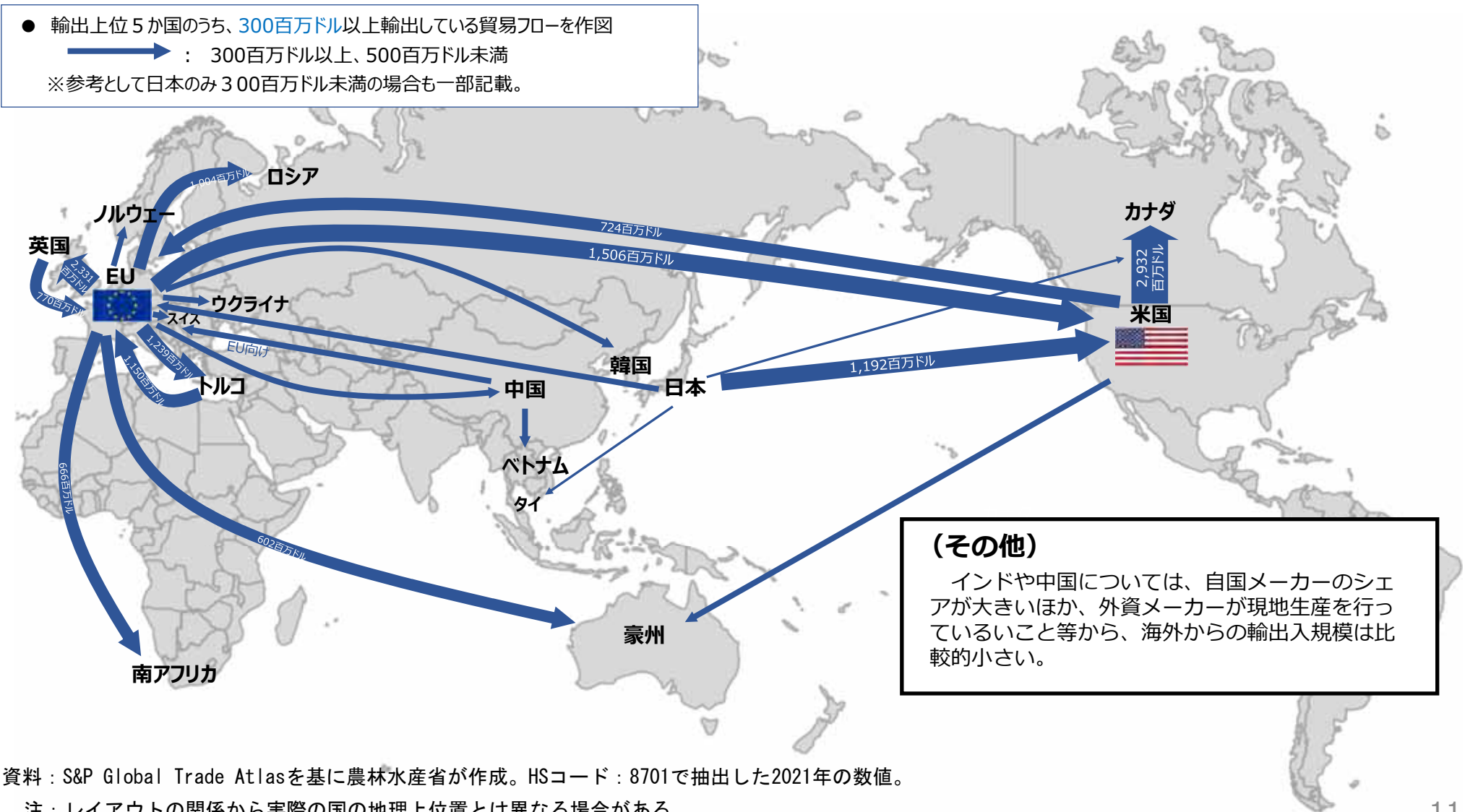
トラクタの貿易フロー（2021年 | 金額ベース）

- トラクタの輸出について、EUや日本から米国向けの輸出が多い。米国は主にカナダに輸出している。
- 日本は米国への輸出が特に大きく（馬力の小さい製品が中心）、その他は、フランス、タイ、カナダなどに輸出している。

- 輸出上位 5 か国のうち、**300百万ドル**以上輸出している貿易フローを作図
→ : 300百万ドル以上、500百万ドル未満
※参考として日本のみ 3 00百万ドル未満の場合も一部記載。

(参考として日本のみ300百万ドル未満の場合も一部記載。)

※参考として日本のみ300百万ドル未満の場合も一部記載。



(その他)

インドや中国については、本国メーカーのシェアが大きいほか、外資メーカーが現地生産を行っていること等から、海外からの輸出入規模は比較的小さい。

資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード：8701で抽出した2021年の数値。

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

これからの農業機械

- 我が国の担い手が減少・高齢化し、労働力不足が深刻化。また、農地集積により、規模が急速に拡大している担い手も見られ、作業面積の限界を打破するイノベーションが必要。

「農業」 × 「先端技術」 = 「スマート農業」

① 作業の自動化

ロボットトラクタ、スマホで操作する水田の水管理システムなどの活用により、作業を自動化し人手を省くことが可能に

② 情報共有の簡易化

位置情報と連動した経営管理アプリの活用により、作業の記録をデジタル化・自動化し、熟練者でなくても生産活動の主体になることが可能に

③ データの活用

ドローン・衛星によるセンシングデータや気象データのAI解析により、農作物の生育や病虫害を予測し、高度な農業経営が可能に



データ連携基盤

農業データ連携基盤

スマート農業に必要なデータを連携・共有・提供。

連携



スマートフードチェーン・プラットフォーム

生産から加工・流通・消費・輸出に至るデータを連携。

※内閣府 戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）「スマートバイオ産業・農業基盤技術」において開発中。令和4年度中に社会実装。

実用化されたスマート農機の活躍

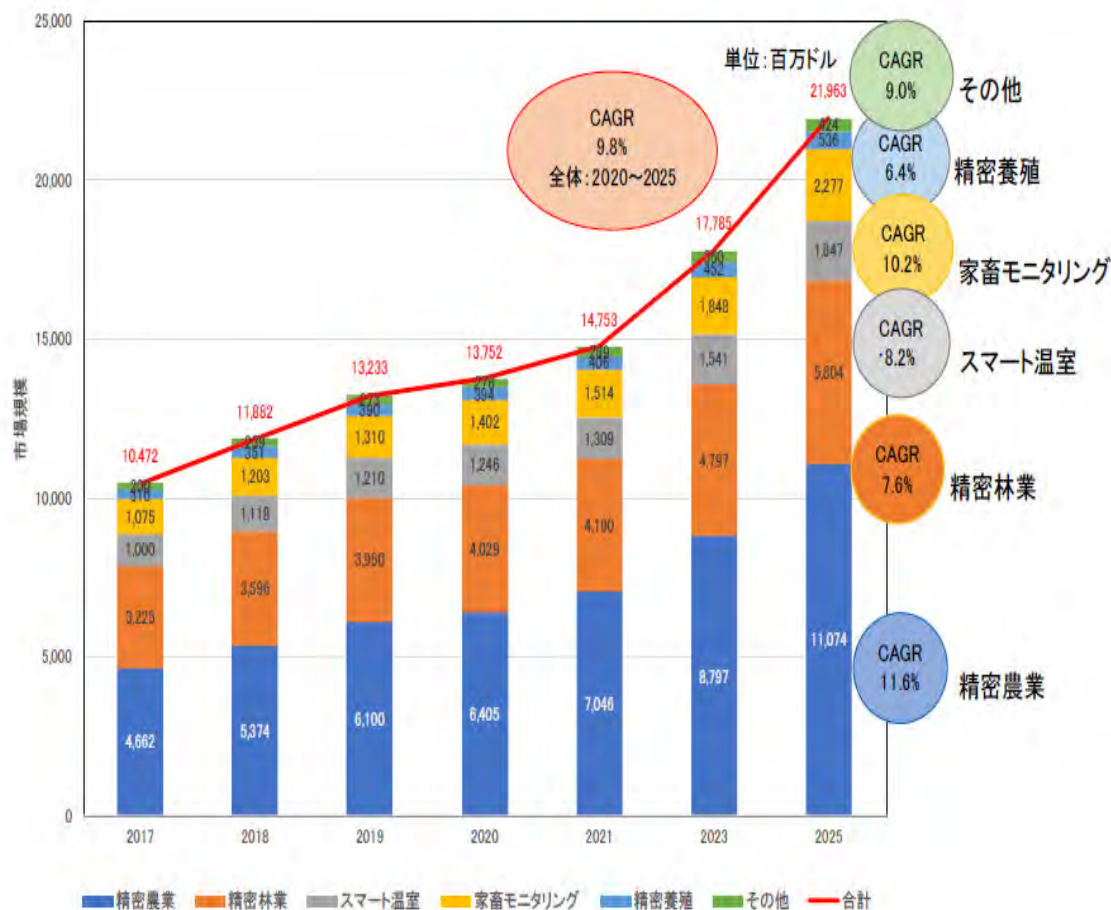
- スマート農機の導入により、作業の省力化や負担の軽減、熟練者でなくても高度な営農が可能となる等、現場の課題解決され、収量向上等、生産性の限界を打破しつつある。

■ ドローン / Drone 農業散布や畑場のセンシングなど、農業分野でもドローンの活用が進んでいます。また、セキュリティ対策についても検討が行われています。  未来を支えるセキュアな国産ドローン ～株式会社ACSL ～ACSL Ltd.	新しい農業をつなぐ「Nile-T20」 ～株式会社 Nileworks Inc. ～Nileworks Inc.  農業用ハイスピードローン開発 ～株式会社 Nileworks Inc. ～Institute for Rural Engineering, NARO 	■ トラクター・コンバイン・田植機 / Tractor, Combine Harvester and Rice Transplanter 水田作での耕起、田植え、収穫といった作業でも、ロボットによる自動化が実現しています。  ロボット田植機 ～井関農機株式会社 ～ISEKI & CO., LTD.	アグリロボトラクタ (写真上段) アグリロボコンバイン (写真中段) アグリロボ田植機 (写真下段) ～株式会社 Kubota ～KUBOTA Corporation   
■ 作業用ロボット / Working Robot 収穫物の選別、草刈り、農業散布など、農業現場の様々な作業を対象としてロボットの活用が進んでいます。  小型多機能ロボット「XCP100」 ～株式会社 DONKEY ～DONKEY Corporation  リモコン草刈機 + 自律走行キット ～三陽機械株式会社/東京大学 ～SANYO KIKI CO., LTD./The University of Tokyo	農場リモートセンシングロボット ～GINZA FARM株式会社 ～GINZA FARM Co., Ltd.  移動を基盤とする農支援ロボット ～国立大学法人 宇都宮大学 ～Utsunomiya University  自律走行型農業散布ロボット ～株式会社 レグミン ～Legmin Inc. 	■ その他の農業技術 / Others 作物の生育管理や畑場管理など、人手や手間がかかる場面でも様々な技術が開発され、活用が進んでいます。  AI、スマートグラスを使用したブドウ栽培管理ソリューション ～株式会社 YSK e-com ～YSK e-com Co., Ltd.  圃場水管理システム ～農研機構 農村工学研究部門 ～Institute for Rural Engineering, NARO	つり下げ型画像計測ロボット ～PLANT DATA株式会社 ～PLANT DATA Co., Ltd.  AI搭載着果モニタリング装置 ～農研機構 農業機械研究部門 ～Institute of Agricultural Machinery, NARO  AI灌水施肥ロボット「ゼロアグリ」 ～株式会社 ルートネットワークス ～Routrek Networks, Inc. 
■ 収穫用ロボット / Harvesting Robot 様々な作物を対象として収穫ロボットの開発・導入が進んでいます。  カボチャ収穫ロボット ～北海道大学/北見工業大学/農研機構 東北道産農研センター ～Hokkaido University/Kitami Institute of Technology/Hokkaido Agricultural Research Center, NARO	ニホンナシ収穫・運搬ロボット ～農研機構 果樹茶葉研究部門 (企業型実証大規模果樹生産実証センター) ～Institute of Fruit Tree and Tea Science, NARO  ピーマン自動収穫ロボット「L」 ～AGRIST株式会社 ～AGRIST Inc. 	パワーアシストスーツ ～パワーアシストインターナショナル株式会社 ～Power Assist International Corporation  トマト収穫ロボット ～パナソニック株式会社 ～Panasonic Production Engineering Co., Ltd. 	搾乳ユニット自動搬送装置「UCA30A」 (写真上段) 敷料散布装置「BSMA08」 (写真下段) ～オリオン機械株式会社 ～ORION Machinery Co., Ltd.  

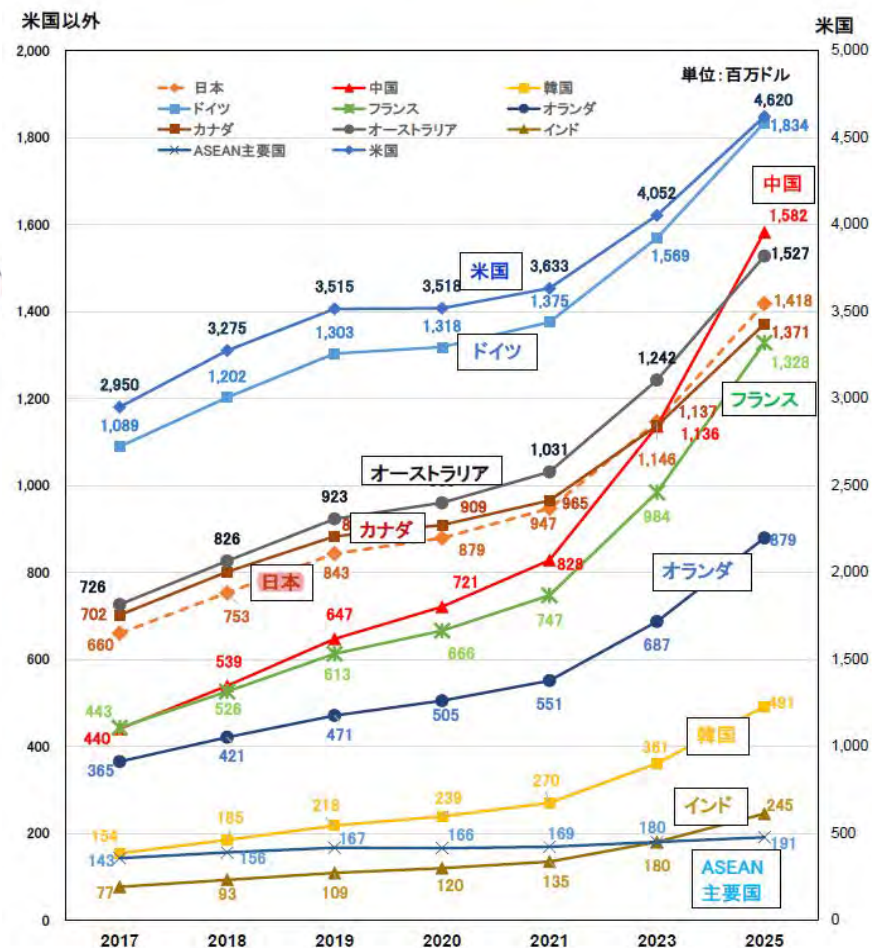
(参考) スマート農業市場

- 民間の調査によると、世界のスマート農業市場は、2019 年は約 132 億ドルで、2025 年には約 220 億ドルになるとされている。
- 日本のスマート農業市場は、2019 年は約 8 億ドルで、2025 年は約 14 億ドルとなるとされている。

スマート農業の市場予測



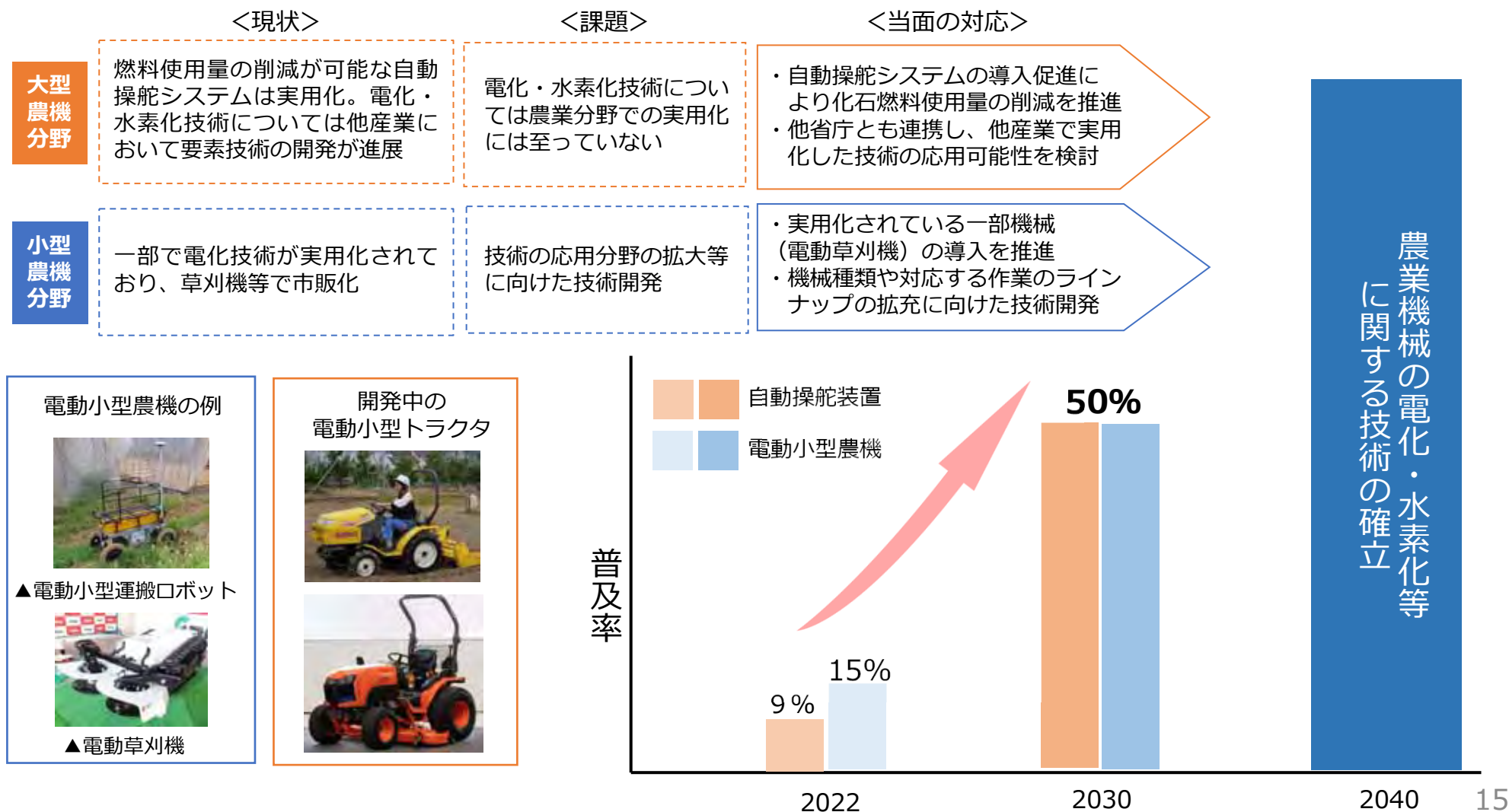
スマート農業市場の国別推移



資料: Smart Agriculture Market Globalforecast to 2025 (M&M) より三菱ケミカルリサーチにて作成
注: CAGRは年平均成長率

(参考) みどりの食料システム戦略（農業機械分野）

- 農林水産省では、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現する「みどりの食料システム戦略」を策定。農業機械については、2040年までに、化石燃料使用量削減に資する電化・水素化等に関する技術の確立を目指すこととしている。



【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 11 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--